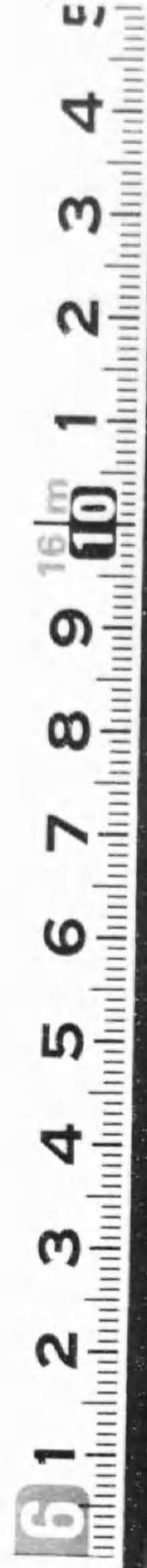


始



要說心理學

文學士 見尾勝馬 著

東京
文原堂 刊

特 220
727

學 理 心 說 要



東 京
文 原 堂



342-646.

は し が き

題して要説心理學といふ。心理學の要領を記せるものである。心理學を教壇に講ずること既に九星霜或はノートを用ゐる或は教科書を用ゐるしも一利あれば一害あり、その短を捨て、その長を探り學生諸子に學習上新しき趣味を與へむがためにつくれるもの即ちこの書である。心理學を學ばんとする初學の學生諸子まづ講義の前日その要領を通讀することが必要である。豫習にあまり時間を費すことは學習上利益少し。この意味に於て本書により要領を會得して教室に入りその足らざる所は講義をもつて補へば心理學に通ずる一捷徑ともなすことが出来る。

從來の組方即ち縦組の慣習を打破つて横組にしたるは心理學的基礎に依るものである。人間の眼は横に相並べるものであつて、これ

は し が き

を動かすにあつて上下に動かすときは疲勞を多く感ずるものなれば縦讀に伴ふ疲勞を減ずるため、他の理由としては洋書を読む習慣に適應せしめんがためかくは事新しく横組となしたるものである。

各頁の下に余白をつくりしは學生諸子をして教師の講義を筆記せしめんがためのものである。しかし又教師の講義のみに限る必要なし。學生自ら心理學を他の參考書により研究しその材料をこの余白に書き記して他山の石となすことは著者の心より歡迎するところである。教育上には注入主義よりも學習主義の方がその効果大なればなり。

最後にこの新しき試みに對して發行書店主の英斷を著者は心から感謝してやまない。

昭和七年六月一日

練馬の里にて

著 者 誌 す

要 説 心 理 學 目 次

第 一 編 緒 論

第一章 心理學の位置	1
一、心理學の定義	1
二、科學の分類	2
三、心理學の取扱ふ問題	10
第二章 心理學の分類	12
一、目的による分類	12
二、對象による分類	12
三、研究法による分類	14
第三章 心理學の研究法	15
一、觀察法	15
二、實驗法	16
三、測定法	17
四、統計法	18

目 次

第四章 意識	19
一、意識の意義	19
二、意識の内容	21
第五章 注意	22
一、注意の意義	22
二、注意の種類	23
三、注意の本質	23
四、注意と教育	25
第六章 反射運動と本能運動	26
一、反射運動	26
二、自動運動	26
三、本能運動	27
四、本能の種類	27
五、本能の特徴	31
六、遊戯の學說	33
第七章 習慣	35

目 次

一、習慣の意義	35
二、習慣の効果	35
三、習慣の形成	36
四、學習の發達經過形式	36

第二編 知的活動

第一章 感覺	39
一、知覺と感覺	39
二、感覺の生起	40
三、感覺器官	40
四、感覺の種類	42
五、皮膚覺	43
六、味覺	45
七、嗅覺	46
八、聽覺	48
九、視覺	51
十、一般感覺	58

目 次

十一、感覺の強度	59
第二章 知 覺	60
一、内包的知覺	61
二、外延的知覺	62
三、錯覺と幻覺	64
四、記憶表象と想像表象	65
第三章 聯 合	73
一、感覺の聯合	73
二、知覺表象の聯合	75
第四章 思 考	78
第五章 知 能	82
一、知能の意義	82
二、知能の内容	83
三、知能の性質上の標式	83
四、想像の標式	86
五、思惟の標式	86

目 次

六、知能測定法	87
第六章 知能異常	87
第三編 情 意 活 動	
第一章 感 情	91
一、感情の意義	91
感覺と單純感情の差異	100
色彩の調和感情	103
音響の調和感情	106
形態の美的感情	108
時律の感情	109
第二章 情 緒	110
一、情緒の意義	110
二、情緒の内容	111
三、情緒流動の形式	112
四、情緒と觀念との關係	113
五、情緒の表出	114

目 次

情緒流動の變態.....	114
第三章 情 操.....	116
一、情操の意義.....	116
二、情操の種類.....	117
三、美意識の特質.....	119
第四章 意 志.....	122
一、意志の意義.....	122
二、意志の種類.....	125
三、性格の異常.....	127
第五章 素 質.....	131
素質と意志との關係.....	137
精神的疾患.....	138

要 說 心 理 學

見 尾 勝 馬 著

第 一 編 緒 論

第 一 章 心 理 學 の 位 置

一、心理學の定義

心理學 (Psychology) とは簡単に云へば「こゝろ」に関する學問である。心理學では「こゝろ」のことを精神と云ひ又は意識と稱する。従つて心理學とは精神に関する科學又は意識に関する科學といふことが出来る。一體人間の「こゝろ」とはどんなものであるかを研究

するのが心理学の目的である。しかしその「こゝろ」といつても従来の心理学や倫理学や哲学のやうな想像的な「こゝろ」の研究ではなくして生き生きした吾々の直接に経験し得る「こゝろ」の研究である。この直接に経験し得る「こゝろ」とは一體どんなものであるか。即ちこの「こゝろ」の根本的要素は何であるか。またどの様に變化するものであるか。また變化するにはどんな法則のもとに變化するものであるかを研究する學問が心理学である。そこで學問を二大別して自然科学と精神科學とに區分して心理学は精神科學の内にに入れてをるけれども心理学は他の精神科學とは「直接意識の研究」といふ意味に於て異つてをるものである。「直接意識」を研究する學問は他にない。この意味に於て心理学は根本科學であり學問の女王といふことが出来る。

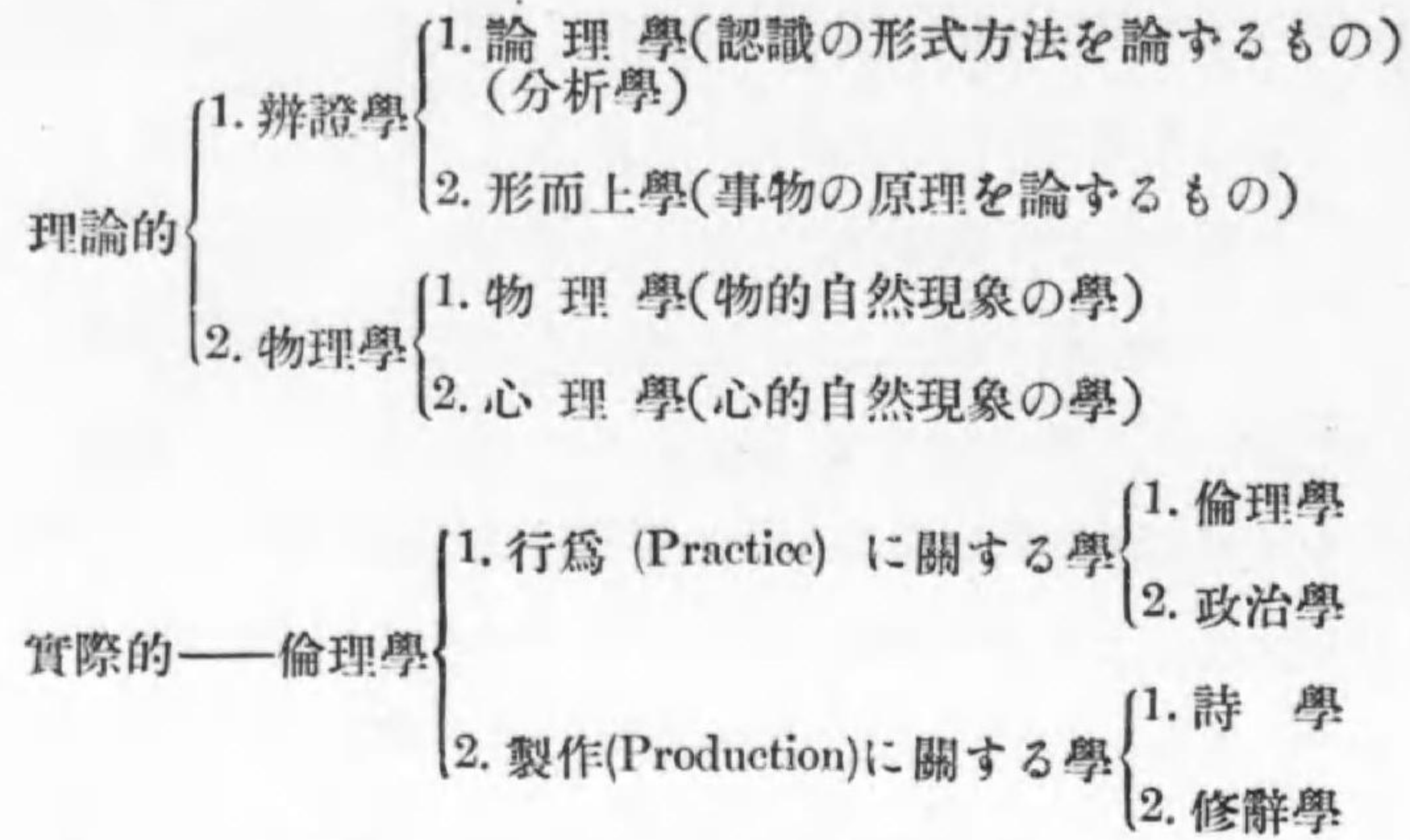
二、科學の分類

(1) プラトン (Platon) は種々の問題に上り来る心的作用のに基いて分類をこころみた。

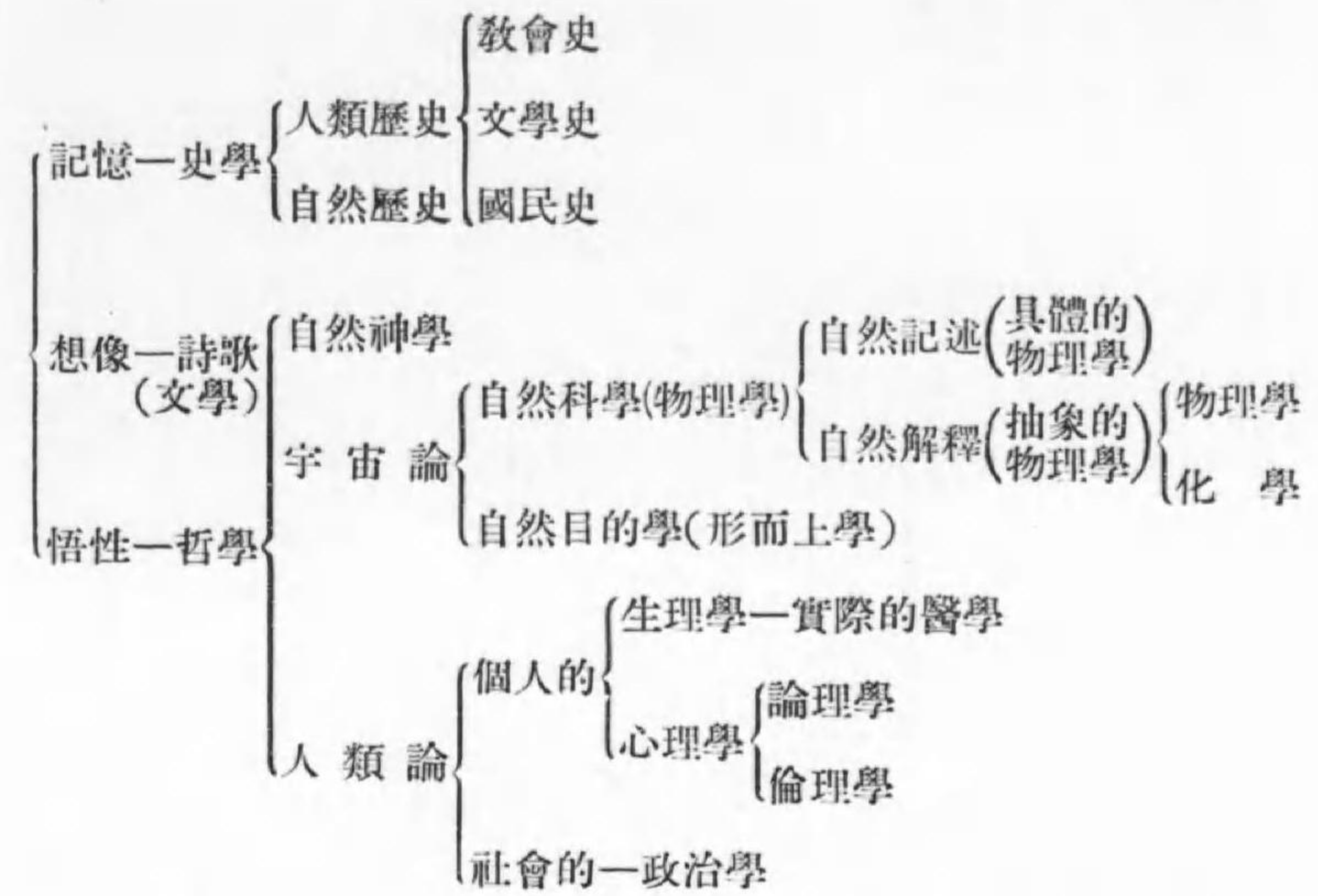
1. 辨證學(論理学、哲学)……………認識(概念的認識、真知)
2. 物 理 學……………感覺
3. 倫 理 學……………意欲

既に辨證學 (Dialectics) は眞實在を論難討究する科學であり、物理学は感覺の對象たる自然現象を攻究する科學であり、倫理学とは意欲の作用たる人の行爲、品性等を論究する科學であるといふのである。

(2) アリストテレス (Aristoteles) はプラトンに従つて心的作用上大體三種の學を認めたが、更に又學の目的から二様の區別を立てて居る。



(3) ベーコン(Bacon)も理論的方面と實際的方面とに區分したが次に理論的方面のみを列挙する。彼も亦諸科學研究の能力は何れも知的作用であるから、心的作用の分類にもとづいて純然たる主觀的方面の區別である。



(4) ベンザム (Bentham) とアムペールとは學を「自然科學」と「精神科學」とに分けたことは學問分類上新紀元を作つたものである。

(5) コムト (Comte) の説によれば本来諸學研究の精神作用は何れも同一であるべきはづで又研究の對象は歸する所皆自然物即ち物體となるもので、その點から學問を區別することは出来ない。故に結局、學問は一元的直線的排列を取るに他はない。従つて分類ではなく系統であるといふのである。

解析——幾何學(以上二を合して數學)——力學——星學(地質學、鑛物學を含む)——物理學——化學——生物學(動物學、植物學)——社會學

(6) スペンサー (Spencer)

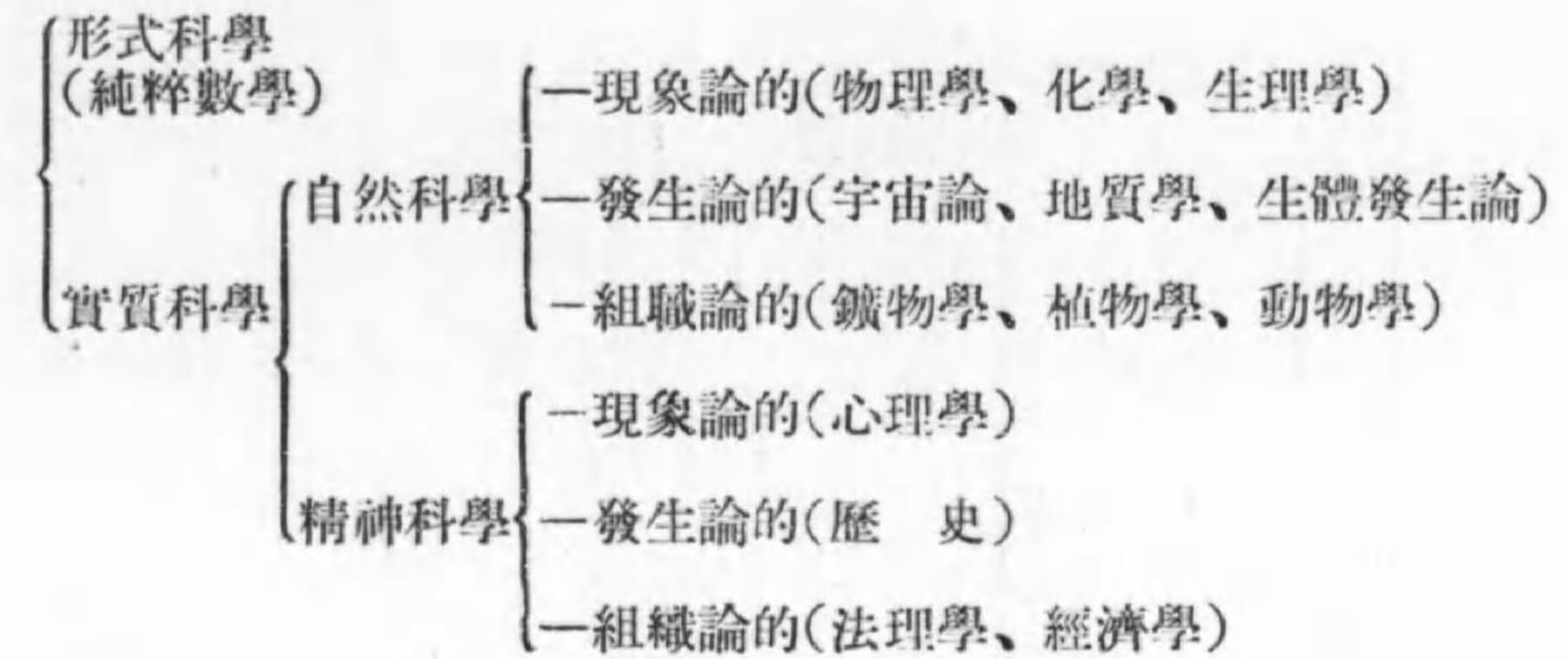
抽象的群——(一)數學——(二)抽象的力學

抽象的及具體的群——(三)具體的力學——(四)物理學——(五)化學

具體的群——(六)星學——(七)地質學——(八)生物學——(九)

心理學——(十)社會學

(7) ヴント (Wundt)

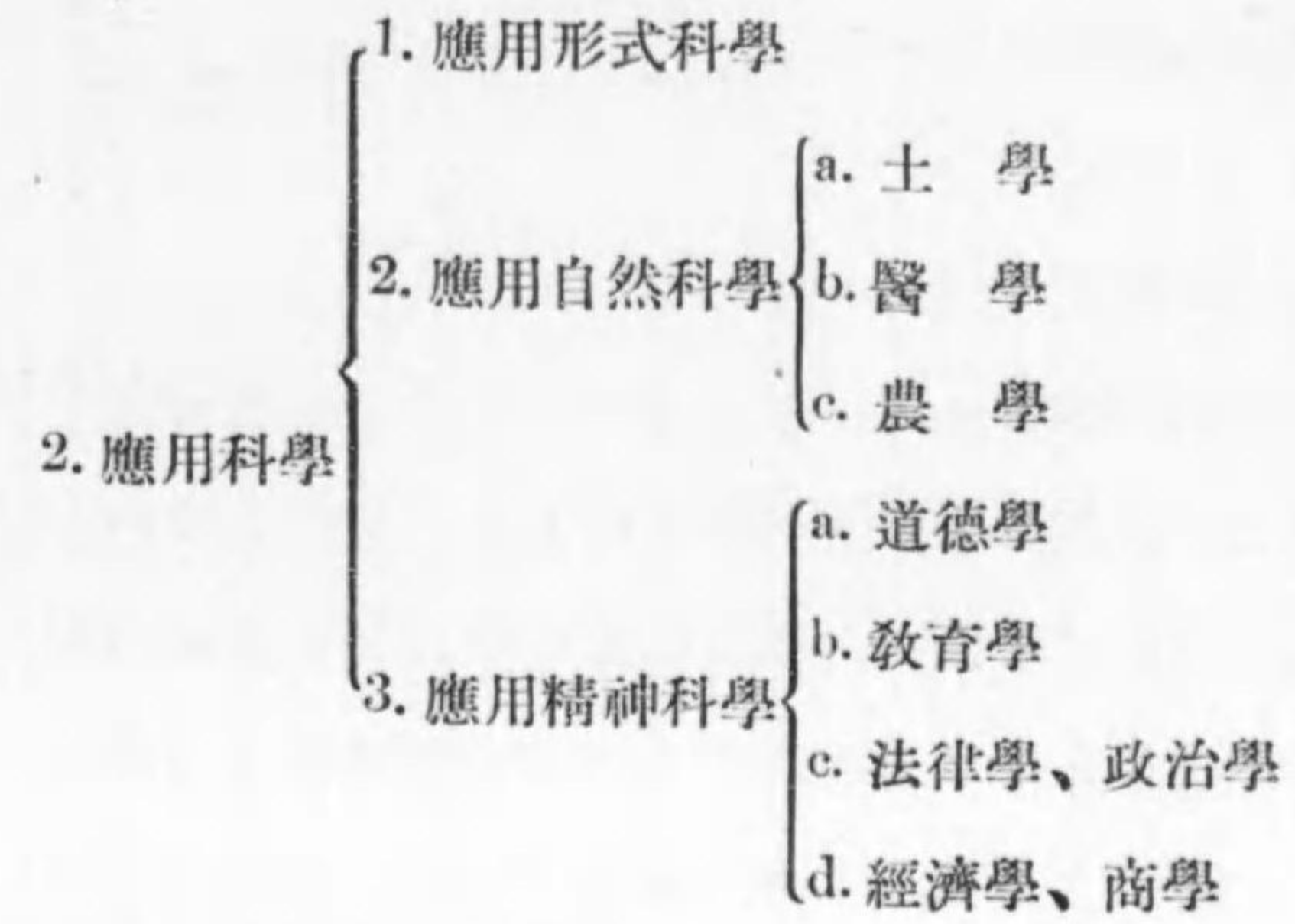


以上は西洋の學者の科學の分類であるが現今の科學は大體、

1. 科學の目的により
2. 科學の對象により
3. 科學の研究方法により

て學問を分類してをる。次に表示すれば

(I) 目的による分類



(II) 對象による分類

1. 形式科學(對象を現象界に有せざるもの)
2. 自然科學(自然現象を對象とせるもの)
3. 精神科學(精神現象を對象とせるもの)

(III) 研究方法による分類

1. 法則の科學(自然科學)

2. 價値の科學(文化科學)

三、心理學の取扱ふ問題

1. 「こゝろ」即ち意識又は精神とはどんなものであるかの問題をの扱ふ。又意識の起源とか意識流動の形式等も研究すべきである。

2. 意識の要素。即ち意識を分析して見るとその單位即ち要素は何から出來てをるかの問題である。意識とはきはめて概括的の言葉である。そこでこれをこまかく分析して見る必要がある。

3. 意識の要素は一つではない。數多ある。それでそれら要素間の關係を研究する必要がある。

4. 心理學は主として意識即ち精神の問題即ち心的過程を取扱ふものであるけれども決して生理的方面を看過すべきものではない。心的過程と生理的過程とは關係のないものでもなく、又因果關係をな

せるものでもなく、平行關係をなせるものたることを知る必要がある。

5. 吾人の意識即ち精神はその周囲の事情によつて變化をうくべきものである。従つて精神と環境との關係も研究すべきである。環境には自然的環境と社會的環境とがある。

6. 吾人の精神はもと動物精神の發達と見ることが出来る。これは進化論の證明するところである。この意味に於て人間精神と動物精神との關係を研究する必要がある。

7. 各個人にはその個人精神に先天的に特有な方面がある。即ち個性と稱する。即ち吾人の個人差の長所短所を研究する必要がある。

8. 一個人の場合の精神現象と一個人が集つて群集となつた場合との精神現象とは大いに違つてをる。心理學はこの様な場合の集團心理をも研究する必要がある。

9. 倫理學上に云ふ人格と心理學上に云ふ所の人格とは如何なる相違があるか。

10. 又心理學上の自我と倫理學上哲學上の自我にはいかなる相違があるか。

第二章 心理學の分類

一、目的による分類

1. 理論的心理學(理論を主とするもの)
2. 應用心理學(應用方面を主とするもの)

二、對象による分類

1. 一般心理學(人間の精神全體に共通(普通心理學と稱す)なる方面の研究)

2. 特殊心理學

1. 動物心理學(比較心理學とも云ふ)
2. 兒童心理學(發達心理學とも云ふ)
3. 青年心理學
 - a. 男子青年心理學
 - b. 女子青年心理學
4. 差異心理學(智能心理學と云ふ)
5. 異常心理學(變態心理學又は犯罪心理學と云ふ)
6. 團體心理學(集團心理學と稱す)
 - a. 社會心理學
 - b. 群集心理學
 - c. 民族心理學
7. 宗教心理學

8. 精神作業心理學
9. 精神科學心理學
10. 職業心理學(一名應用心理學といふ)
 - a. 醫事心理學
 - b. 法廷心理學
 - c. 教育心理學
 - d. 産業心理學
 - e. 軍事心理學(航空心理學を含む)
 - f. 藝術心理學
 - g. 家庭心理學

三、研究法による分類

1. 構成的心理學
2. 機能的心理學

3. 行動主義心理學
4. 形態心理學

-
1. 生理的心理學
 2. 實驗的心理學
 3. 統計的心理學

第三章 心理學の研究法

一、観 察 法

1. 内省法 自己の精神現象を直接に観察する方法。

内省法の可能を否定する見解に二種あり

(1)精神現象を内観せんとせば観察せらるる意識過程自ら變化するを以つて、その現象を眞の儘にて観察することは全然不可能である。

(2) 吾人は自己を観察する者と観察せらるる者との二個に分離することの出来ぬこと

さればこの内省法の缺點を補ふために追想法を使用して直接の記憶によつて内観することが出来る。

2. 外察法 他人の精神現象の表出又は動作を観察して間接にその精神現象を研究する方法。

二、實 験 法

実験とは人爲的にある慾求する現象を起して観察することである。

実験をなす時の條件

1. 実験者は観察せんとする現象の生起を任意に規定し得る状態にあるを要す。

2. 実験者は注意を緊張して現象を知覺し又其變化を注意すべし。

3. 各観察は正確なる結果を得んがために同一状態の下に反復せら

れざる可らず。

4. 現象を生ぜしめたる條件は任意に變化せられその變化と變化の影響の測定せらるるを要す。

実験は兒童の精神現象を研究する際にも適用出来るものであるが又ある學者は次の理由をもつて困難なるものと考へるものもある。

1. 心理學的實驗にあつては被験者は實驗者の意向を充分理解しなくてはならない。然るに兒童はこの理解甚だ困難にして、従つて幼兒には實驗を行ふことは出来ぬといふのである。

2. 兒童は暗示性に富むを以て實驗者の意向の影響に支配せらるること多くために兒童に爲したる實驗の結果は甚だ不確實であるといふのである。

三、測定法 (吾人の精神は直接には測定する能はず必ずや間接の測定によらざる可らず)

- a. 刺戟法(精神現象を喚起したる刺戟を測定す)
- b. 表出法(精神の表現たる運動を計量す)
- c. 反應法(精神の時間的測定法)

四、統 計 法

吾人はある一定の精神作用が一個人又は個人の集團に幾度發現するかを計算することが出来る。例へば兒童の夢に於て動物の觀念の現はるる度数を計算するが如きはそれである。統計法は成人の心理研究に於ても屢々用ひらるるものであるが、殊に兒童心理學、教育學に於て一層重要な意義をもつてをる。何故なれば兒童の多くの精神作用は嚴密なる實驗研究を施すことが出来ないからである。かゝる場合には個々の觀察の結果を総合し、其發現の度数の消長に基き兒童の精神の一般的特徴を推論し得ることがある。

a. 質 問 法

- b. 相 關 法
- c. 品 等 法

第四章 意 識 (Consciousness)

一、意識の意義

吾々の「こゝろ」は覺知状態の場合と、無覺知状態との場合がある。前者を意識と稱し後者を無意識と稱する。心理學では「こゝろ」のことを意識と稱するが哲學者の云ふやうな抽象的の意識をいふのではなくして直接經驗し得る意識即ち覺知状態の「こゝろ」をさして意識といふのである。意識のことを一名精神とも稱することがあるが精神の方は物質に對する言葉であり、意識の方は無意識に對する言葉である。意識の最も明瞭になつた場合を明識と稱し意識と無

意識の中間の状態を半意識と稱する。夢などを見る場合は半意識の場合が多いやうである。意識の生ずるのは刺激があつてその刺激がある一定の程度に達してでないと意識は生じない。刺激あれば必ずや意識が生ずるかといふに決してそうでない。意識の生ずる界を心理學では識閾 (Stimulus threshold) と稱する。刺激と意識との関係は重大なるものであつて意識は主觀的のもの刺激は客觀的のものである。

意識界	物質界
1. 繼續的なり	共存的なり
2. 自由なり	運動に衝突あり
3. 意識現象の表れ方は複雑である	物的現象の表れ方は單純である
4. 意識界はその内容は増加す	物質界には増減なし
5. 結合統一作用あり	結合統一作用なし

6. 意識界は消散し易し

物質界は餘程の努力によらざれば變化せず

二、意識の内容

意識の内容即ち要素に就ては古來三分法を用ゐて來た。即ち人間の「こゝろ」は知的方面と情的方面と意志的方面との三方面あるものと考へてをつた。ギリシヤのプラトンもアリストートルをはじめカントでさへも三分法を用ゐてをつた。然るに十九世紀の實驗心理學の研究によると知的方面は別として情的方面と意志的方面とは區別すべきものでなくして、全く同一視すべきものであることが解つた。それで今日の心理學では意識の内容は知的方面と情意的方面の二方面であると考へてをる。しかし知的方面のことを心理學では觀念的方面と稱し、又この觀念的方面をよくしらべて見ると觀念は感覺から出來てをるからして意識の内容は感覺と情意的方面といふ二方面から出來てをることゝなる。前者を意識の客觀的方面と稱し後

者を意識の主観的方面と稱してをる。しかし感覺は意識の一部分であつて刺激とは異なるものである。

第五章 注意

一、注意の意義

意識がある一つの對象に集注した場合を名づけて注意といふ。即ち注意とは意識の焦點をいふのである。

注意の律動 (Rhythm of attention)

注意はいつも同じ強さでもつて繼續することは出来ない。或は強く或は弱くなつてゆく。これを注意の律動といふ。

注意の移動 (Transition of attention)

注意はまた一つの對象から次の對象へ移つてゆくこれを注意の

移動といふ。

二、注意の種類

1. 他動的注意

一名無意注意又は客観注意又は消極的注意といふ。

2. 自動的注意

一名有意注意又は主観注意又は積極的注意といふ。

三、注意の本質

ある學者は注意の根本現象を智的生活に於ける意志活動と看做し注意とは多くの印象中ある特定の印象に有意的に精神を傾注する作用なりと説いてをる。これは注意の意志的解釋である。

又他の學者は注意の根本現象を智的生活と感情との關係より説明せんとするものがある。ステーリングは注意を定義して感情による一定觀念の固定なりといつてをる。通常吾人が印象又は觀念に注意

を傾注せる時は感情の興奮伴隨せるが故にこの説も亦根據のあるものである。これを注意の情緒説といふ。

注意の意志説、情緒説に反對して主智説がある。この説は主觀の態度のみならず觀念内容そのものの變化も注意の本質的性質と看做し注意とは他の多くの觀念に對し一觀念の優越なる地位を占むることであるとなしてをる。従つてその觀念はその内容明瞭となり他との區別が分明となるものである。

注意の本質に關するこれらすべての學説は注意の複雑なる現象を各種の方面から記述したるものであつて相互に他を排斥すべきものではない。即ち主智説は注意状態に於ける印象及び觀念の變化を觀察し、主意説情緒説は注意に於ける主觀の状態を説明せるものである。これをもつて注意の根本現象は精神生活の各瞬間に於て一定の印象又は觀念が意識の明覺點に入りその印象又は觀念の明晰となる

ことである。そして明覺點に入りたる觀念は全精神生活の中心となり他の一切の意識内容を整理統率する。詳言すればこの優超觀念は同時に存在せる他の觀念の進行を規定し、他の觀念は容易に之に結合し、新に再生せられたる觀念も亦之に聯合するのである。

四、注意と教育

精神薄弱なる兒童は注意作用に缺陷多く強いて注意せんと欲せば苦痛を伴生す。生來の精神薄弱なるものに二種あり、一を白痴といひ、他を痴愚といふ。白痴の甚しいものは教育をうくることが出来ない。しかし軽いものは多少教化性がある。痴愚とは感覺、運動に大なる障礙はないけれども記憶、聯想、思考の作用の常人の半ばにも達してないものをいふのである。此等の兒童を教育するには教師は特殊の方法により、先づ注意の發達を促し次ぎに感覺及び言語を練習せしむべきである。

第六章 反射運動と本能運動

一、反射運動

反射運動とは自分で動かんとする意志はないけれども外部から何か一つの刺激のある際には手脚を動かすが如き運動である。これに二種類ある。これも中樞が自發的にいとなむ環境適應の過程と見ることが出来る。

1. 感覺的反射運動

眼の瞬、嚏、咳等の如く、運動後その結果を意識するもの。

2. 生理的反射運動

瞳孔の開閉の如く直接に感覺到現はれないもの。

二、自動運動

自動運動とは心臓、肺、腸の運動、血液の循環、腺の分泌等である。

三、本能運動

本能運動とは一定の刺激に對して起る複雑なる運動の一列であつて、常に意識を伴ふをその特徴とする。されば本能運動は一見意志動作又は習慣の如きものであるけれども生後の習熟を待たずして比較的完全になさるるものである。故に本能とは一定の刺激に對して行ふ複雑なる遺傳的反應といふことが出来る。本能運動の遂行には反射運動の混入するが故に往々兩者を混同することもあるが兩者は運動の單純、複雑、及び意識の有無によつて區別することが出来る。

四、本能の種類

本能をその目的より區別すれば次の四つとすることが出来る。

(一) 自己保存の本能(個體本能)

(二) 種族保存の本能

(三) 社會的本能

(四) 發達的本能

(一) 自己保存の本能

各種の本能中その勢力の最も強いものは、自己保存の本能である。この本能は個體生活の要求より生じ食物攝取の衝動、及び防禦の衝動となつてあらはれる。恐怖争闘等の運動はこれら本能の具體的に發顯したるものである。動物が巢を作る如きは防禦本能であるがその兒子を保護するのは種族本能に屬する。

(a) 單純運動……把捉、移動、發聲等

(b) 營養本能……飲食、睡眠、漁獵、耕作、蒐集、貯蓄、衣服

(c) 防禁本能……恐怖、逃避(營巢住居)

(d) 攻撃本能……嫌惡、排斥、憎惡、憤怒、争闘、競争

(二) 種族の保存の本能

種族の保存を目的として行はるゝ複雑なる運動にして鳥の巢を造り、卵を孵化し、或は季節に應じて居を轉ずる等は皆この本能である性的衝動、親的衝動に關する動作は種族的本能の現はれたるものである。

(a) 營巢本能……移住、漂浪、營巢、住居

(b) 性愛本能……性愛、羞恥、嫉妬、産卵、産兒

(c) 養護本能……親子愛、兄弟愛

(三) 社會的本能

社會的本能とは社會的生活の必要、或はその結果より生じたるものであつて、同類の群居せんとする性、及び群居に於て現はるゝ羞恥、同情、獻身等はこの表現したるものである。道德的

衝動の如きもこの社会的本能に聯關して發展するものである。

(a) 獨居性、群居性

(b) 同情、獻身

(c) 自卑性、誇示性

(四) 發達的本能

心身の發達を目的とし遺傳的傾向に基き行はるゝものを發達的本能といふ。就中人類の發達に對し、最も重要なるものは遊技である。

(a) 遊 戲

それ自身何等の實利的意味なく自己を楽しましむる爲に行ふものである。仕事と對立す。而して遊戯は實際生活に必要な活動を學び又境遇に順應する方法を會得するに必要である。

(b) 摸倣、他人の行動をそのまま反復することである。

1. 被 暗 示……意識的なるもの

2. 生理的摸倣……無意識的なるもの

3. 思想及精神的摸倣……智識、智能の發達に必要なもので意識的のもの

4. 感 化……精神上の無意識的摸倣をいふ。

(c) 好 奇 心

これが進歩すれば知識欲となる。幼兒は二三歳でいちぢるしくこの本能をあらはす。知的發達は主としてこの本能の適時に於ける適當なる指導にもとづくものである。

五、本能の特徴

1. 一 時 性

ある本能の發動期にあたり外界の刺激を缺くときは遂にその發現を起さざることがある。これを本能の一時性といふ。スポールデ

イングの實驗によれば鶏の雛が運動せる物體を追及する本能は生後四日以内に起るものであるが、もしこの期間彼の眼を掩ひ置くときはその後は決して追求本能の發現がないのである。この事實は本能の教育に於て頗る重要な意義を有する。

2. 定期性

本能は必ずしも誕生と共に現はるゝにあらずして各本能の發現には一定の時期がある。之を本能の定期性といふ。人類に於て最も早く現るゝは自己保存の本能であつて發達的本能之に次ぎ社會的本能は三、四歳頃より漸次に發達し種族本能は青春期に至つて初めて現はれるものである。

3. 週期性

本能はその目的を達すればそれで消滅するかといふと決して消滅するものではない。時間なり時日が経過すると再びその目的を達

せんことを計るものである。これを本能の週期性といふ。食事、睡眠は一日の週期をもつてをる。生殖慾のごときは動物と人類とによつて週期をことにしてをる。

4. 變化性

ある本能を生ずるに必要な刺激に類似せる他の刺激を定期にあたへると生ずる本能は固有の形式と少しく異なるものとなることが出来る。この様に條件を變化することによつて本能は幾分形式内容を變化せしむることが出来る。これ即ち環境の影響又は教育の影響によつて人性を改善し得る基礎の一つである。

六、遊戯の學說

1. 勢力過剩說

生活體としての自己の生命保存に必要な勢力以上の勢力が貯へられた時これを遊戯として外部に發散するといふのである。

2. 厭 倦 説

一名休養説とも稱する。この説によると吾人が何か一事に倦み疲れて他の刺激を要求する時起るものが遊戯であるといふのである

3. 反 復 説

これは吾人の遊戯本能は吾人の原始時代に於いて生活上必要であつた活動が反復せられたものといふのである。

4. 練 習 説

この説によれば遊戯とは吾人が將來の生活に必要な諸活動を練習するために本能として現はすものとの説である。

然し茲に注意すべきは遊技は必しもこの學説の一つをもつて説明せざる可らずといふ理由はないので要するに遊戯はこれらの事情が相倚り、相助けて發現するものと見るのが適當であると思ふ。

第七章 習 慣

一、習慣の意義

習慣とは吾人が最初は外界の刺激に順應せんがために努力を用ゐてなした動作が熟練の結果として漸次に努力を用ゐる必要がなくして、一定の刺激と一定の運動との間に聯絡が出来て遂には全く意識の働きすらも用ゐずして完全に順應することの出来るやうになつたものである。俗にいふ學習とは教育上にいふ習慣である。

二、習慣の効果

1. 行動の單純化
2. 敏 捷
3. 精 確

4. 注意減少

5. 疲勞減少

三、習慣の形成

習慣を形成する過程は學習(Learning)又は練習である。學習作用とは不用なる運動を淘汰して目的を達するに必要な運動のみを直進的に行ひ得るに至るまでの動作である。學習の要件は反復に外ならないがこれを有効ならしむるには

1. 強固なる決心
2. 例外をゆるさぬこと
3. 実行の機会を逃さぬこと
4. 考へてをるよりも実行して見ること
5. 繼續力行につとむること

四、學習の發達經過形式

1. 練習の初期にをいては急激の進歩をしめす。これ即ち要素的行動に熟達せるがためである。
2. 次に高原(Plateau)と稱する無進歩の時期がくる。プラトーまでの時間又はプラトーの高さは人によつて差がある。この時期を停滯期といふ。
3. 停滯期についで熟練の急に増すことがある。
 - a. 發奮的努力により
 - b. 偶然の機會に秘訣を悟得して
 - c. 舊習慣消滅せるために

これをもつてすべての事柄を學習するに當つて以上の形式を了解して行ふことが肝要である。

尙學習法の最も初等にして廣く用ゐられつゝあるものに試行錯誤法なるものがある。即ち何でも幾回も試みて見る。そして間違つた

らこれを訂正して習慣となるまではどこまでも試みては直し試みては直しすることが必要である。

又他人の習慣的動作をそのまま模倣することも必要である。自分が一々試みて習慣的動作を形成するのではなく、他人がやって出来た習慣的動作を模倣するのである。そこで習慣は決して頭の中でのものを考へただけでは出来ないものである。必ずやこれを行はなくてはならぬ。

第二編 知的活動

第一章 感 覺

一、知覺と感覺 (Perception と Sensation)

意識のところで既に述べた通り「こゝろ」即ち意識を分析して見ると二方面ある。一つは主観的方面の要素で情意方面、他の一つの方面は客観的方面の要素で観念的方面である。この観念的方面を知覺又は知覺觀念又は知覺表象といふ。しかしてこの知覺表象を分析して見ると感覺表象がある。知覺表象を單に知覺と稱し又感覺表象を單に感覺と稱する。従來は意識の要素を知覺表象とのみ考へてをつたけれどもこの知覺表象こそ感覺表象の融合せるものであることが近世の實驗心理によつて明かにされたのである。

尙茲に注意すべきは知覺表象を生ずる作用を知覺といひ、感覺表象を生ずる過程を感覺又は感覺作用といふ。

二、感覺の生起

外界の刺激が一定の感覺器官に到達すればそこに分布された感覺神經の末梢は一定の變化をうけて一種の興奮を起す。そしてその興奮は直ちに中樞に傳達せられて大脳に達すると意識中に感覺表象が起きるのである。吾人が外物を認識する基礎はこの感覺表象に存する。即ち外界の刺激と感覺器官との媒介によつて感覺表象は生ずるものである。

三、感覺器官

生物が外界に順應するにはまづ外界の状態及びその變化を知らなくてはならぬ。これを認識といふ。認識作用を司る末梢器官を感官と稱す。

さて感官中最も早く發生したるものは皮膚である。アミーバーの如き極めて簡單なる動物は未だ神經系統の分化なく、特殊の感官を有してゐないけれどもその身體の表面によつてよく外界の變化を知り敵より逃れ、又食物を捕獲する。然るに動物の進化するに従ひ神經系統の分化を起し、特殊の變化、特殊の刺激をば特殊の器官によつて感知するに至る。即ち舌は食物の味を吟味し、鼻は臭を辨別す。鼻は皮膚、舌よりも一段進化したるものであつて外物に接觸せざるも尙その臭的性質を知ることが出来る。これがために知的作用の空間的の範圍著しく擴大せらる。耳に至つては更にその範圍を廣め眼に至つては遠距離のものと雖もその形狀を光によつて知ることが出来る。かくの如く吾人は數種の感官により外界の事變を感受しこれを大脳に傳へる。外界の刺激が大脳に傳へらるる時は生理學的變化を起し、同時に最も簡單なる精神状態が現はれる。これを感覺とい

ふ。されどかくの如き單一なる感覺は日常の精神作用に於ては存在すること稀であつて、多くは數種の感覺の融合状態にて現はれ單一なる感覺を経験することは殆ど不可能である。

四、感覺の種類

感覺の種類は刺激の種類によつて、次の如く分類することが出来る。

(I) 特殊感覺(分化の明瞭なる感覺である)

1. 皮膚覺

a. 壓覺

b. 痛覺

c. 溫覺

d. 冷覺

2. 味覺

3. 嗅覺

4. 聽覺

5. 視覺

(II) 一般感覺(分化の不明瞭なる感覺である)

1. 運動感覺

2. 有機感覺

3. 平衡感覺

五、皮膚覺

a. 壓覺

被験者をして靜坐し眼を閉ぢしめたる後、皮膚の表面を薄き紙片にて軽く觸るゝ時はその刺戟物の何なるかを知るも「何物か觸れたり」との感がある。この感じを壓覺といふ。壓覺の鋭敏は皮膚の部分によつて差がある。これを細かに檢するには皮膚

に觸るゝ刺戟の面積を出來得るだけ、縮少することが必要である。

b. 痛 覺

稍鋭き毛をもつて皮膚を壓して見ると、所々に於て痛みを感じる。これが即ち痛覺であつて、この痛みを感じる點を痛點と名づける。壓覺には明確なる局所徵驗を有すれども痛覺には他に波及するの性質あるが故に明瞭なる局所徵驗を缺く。吾人が齒痛の際その局所を確實に知ることの出來ないのはこれがためである。尙痛覺の特色は刺激がなくなつても繼續することである。

c. 溫覺、冷覺

皮膚を冷水に觸るれば冷感を感じ、湯に浸せば溫感を生ず。これを冷覺及び溫覺といふ。この兩覺は皮膚の何れの部分にも一

様に生起するが如きも精密に検査すれば一樣ではない。吾人の皮膚は外界の溫度に従ひ多少變化するも固有の溫度を有し平均三十三度である。これを生理的零點といふ。この溫度より低き刺激の冷點に觸るゝ時は冷覺を起し、高き刺激の溫點に觸るゝ時は溫覺を起す。冷覺を起すに適當なる刺激は十二度乃至十五度にして溫覺の刺戟は三十八度乃至四十度である。四十五度以上の溫度をもつて冷點を刺激する時は溫覺を生じ五度以下の刺激にて溫點を刺戟する時は冷覺を生ずることがある。これを反對溫度感覺といふ。然るにこれに反して極めて高度の刺激にて冷點を刺戟する時は冷覺を生ず、これを矛盾溫度感覺といふ。

六、味 覺

諸種の物質が溶液となり、舌の粘膜、及び軟口蓋の一部にある味蕾を造れる味細胞を刺激し、その興奮が大脳に達する時は味感を生ず

す。これを味覺と稱す。

味覺の性質は甘、鹹、酸、苦の四種であつて舌面の部分によつて略ぼ分業的に感知せらるる。即ち舌の先端は甘味を、後部舌根に近き部は苦味を、左右兩側は酸味を最も鋭敏に感知し、鹹味は至る所にて鋭く感ぜられる。

尚澁味、辛味等の區別あるも、上記四種の味覺一部の融合に、皮下筋の收縮の加はつた味覺的觀念である。通常吾人の呼んで味といふものは味覺の外に溫度覺、壓覺、嗅覺、筋覺等の融合したる一種の觀念である。従つて同一の食物も溫度によつて味を異にしてをる。風邪の際、嗅覺を失ひ、味の變化するはこれがためである。

七、嗅 覺

揮發性の氣體が鼻腔の上部にある嗅細胞を刺激し、其興奮大腦に達する時は「香ひ」と稱する一種の感覺を生ずる。之を嗅覺といふ。

嗅覺はその質多様であつて、且つ漠然たるが故に未だ完全に分類することは出来ない。吾人は多くその嗅ひを起したる事物の名稱、又は嗅覺に伴ふ感情により「梅の花の香ひ」「麝香」又は「よき香ひ」「あしき香」などの名稱を使用してをる。しかしこれは科學的のものではなくて全く便宜上のものである。現今一般に採用せらるる學術上の分類はツワルデマーケルの分類である。次に示せば

1. エーテルの香
2. アロマの香(例へば樟腦の如し)
3. バルサム香(諸種の花)
4. 麝香の香
5. 菫の臭
6. 焦る臭
7. 山羊の臭(乳酪、汗)

8. 毒の臭(麻醉劑)

9. 催嘔性の臭(死屍)

女子は男子に比較して一般に嗅覺鋭敏にして各種の犯罪者、醜業婦等は常人に比して甚だ遅鈍である。又嗅覺は青年期に至り急に發達して生殖機能と関係がある様である。統計によれば花卉の芳香は青年期後の人の著しく注意する所である。殊に妙齡の女子に對し、非常の愉快を與へ、中には一種の罪惡を犯せりと思惟する程、特種の快感を感じたるものがあるといふことである。

八、聽 覺

發音體の振動が音波となり空氣に傳つて耳に傳へられて音響の感覺即ち聽覺を生ずる。

聽覺の種類に二種ある。一は樂音であつて、一名調音といふ。二は噪音であつて一名雜音といふ。

調音の音波は規則正しき進行をなし噪音は甚だ不規則である。従つて調音は一般に明晰安定にして噪音は不明確なり。日常耳にせる噪音は噪音と多數の調音との混合である。談話の音聲は噪音であつて母音は調音に近い。樂器又は音叉の音は調音にして車馬の響は噪音である。

聽覺の要素は三つあり。

1. 音の高低
2. 音の強弱
3. 音 色

1. 音の高低

音の高低は振動數の多少に依る。普通吾人の音として聽き得る最小振動數は一秒時に約十二にして最大振動數は四萬五千乃至五萬である。されども此等兩端に近き音は共に聽きとりがたく

かつ不快なるを以て通常音楽には六十四乃至五千の振動音を用ふ。

2. 音の強弱

音の強弱は振動の幅によつて定まる。即ちその幅の大なるものは強く、小なるものは弱い。

3. 音色

調音の感覺は單一音の如きも實は多くの音の集合よりなり、その各音を部音と稱す。部音中高さの最も低きものはその強度最も強きが故に他の諸部音を統一せるの觀がある。故にこの音を基音又は原音と云ふ。其他の部音は基音の倍音に當るが故に之を上部音といふ。上部音は基音に比し高けれども弱きが故に常に基音に従屬して調音全體に特殊の趣きを與ふ。この調音の趣きを音色といふ。即ち音色とは基音に對する上部音の關係によつて決定されるものである。

調音の種類

1. 純粹調音

上部音をのぞいて基音のみを考へたる場合

2. 單獨調音

基音及び上部音を含めて考へたもの

3. 複合調音

二つ以上の單獨調音の結合せるもの

複合調音の場合に兩音の差の音と加の音と響く前者を差音といひ後者を加音といふ。

九、視 覺

視覺の刺戟は發光體より起るエーテルの振動にして光波と稱す。この視覺の刺戟たる光波を感知する器官は眼であるが、就中網膜はその最も重要なものである。寫眞の乾板の如く光波に反應す。そ

の組織を見るに拾種の層よりなり、上皮部には桿體、圓錐體と名くる二種の感光細胞がある。圓錐體は色に感じ、桿體はたゞ明暗に感ずるのみである。桿體、圓錐體の上には色素細胞があつて脈絡膜に接す。外來の光波瞳孔より網膜に達する時はこれらの感光細胞は一種の化學變化を起して視神經を興奮せしめ、神經衝動を起す。この衝動が大脳に達する時は明暗又は色彩の感覺を生ず。之を一般に視覺といふ。網膜の中央にある小なる凹處は中央小窩といふ。黄色素を含むを以て黃點ともいふ。この部は感色細胞たる圓錐體の群生せる所であつて、色彩感覺最も鋭敏である。それより周邊に進むに隨ひ、漸次圓錐體の數を減じ遂に全く消滅するを以て網膜の周邊部は色を感ぜず、唯明暗を感ずるのみである。

視覺の種類

1. 光 覺

通常白黒と稱するものは眞の色彩ではなくして、光線の強度の相違である。この光線の強度の感覺を光覺といふ。光覺は白より淡灰色、灰色、濃灰色を経て黒に至る系統であつて、便宜上一直線にて表はすことが出来る。即ち光線の強度微弱な時は感覺は黒となり、強大なる時は白色となる。吾人の眼はこの黒白の間に數百の質の區別をなすことが出来る。

2. 色 覺

白黒の光覺の外に吾々は赤、緑、紫等の感覺をもつてをる。これが即ち色覺である。色覺は光覺に比して稍複雑であつて普通の色の區別の外に明るさの差と濃さの別がある。故に色覺を通常色調、明暗、飽和の三種に分けてをる。しかしこの三種は心理學的分析の結果である。實際の感覺に於ては別々に現はるゝことなく常に融合してをる。例へばある赤色を見るときはその

色と共に明るさ及び濃さをも同時に感知する。

a. 色 調

光波の波長或はその振動数には無数の相違がある。その相違は眼に對して色の相違として現はる。普通吾人の區別し得る色の相違は數百種以上であつて、工業上に用ゐらるるものにも二百餘種ある。この色の質の差を色調と稱す。故に色調は物理的には振動数の差又は波長の相違である。

種々なる色のカードを作り類似したる物より漸次に排列する時は初の色より次第に異なる色に達し、それより又初の色に接近し來り、遂に最初に選びたる色に最も類似したる色にて終る。かくの如く色彩の排列は循環的なるが故に、色調の變化は一個の圓にて表はすことが出来る。色彩を類似の順序に排列したるものを色彩圓といふ。色彩圓中最も顯著なる色彩

を擧ぐれば赤、橙、黄、黄綠、綠、青綠、青、紫、堇の九種である。

色彩圓上相對する二色(例へば青と黄)はその質著しく相違せるが故に反對色といふ。反對色をとり、半圓づゝ組合せ混色板にて速に廻轉する時は灰色を呈す。かくの如く二色を混じて灰色となる色を補色といふ。又補色ならざる任意の二色を混する時はその中間色を生ず。例へば赤、黄を混すれば橙色を生ずるが如し。

b. 明 暗

太陽の光線を分光器にて分析したるスペクトラムの色を見るに、色調の外に著しく明るさの相違がある。即ち黄は最も明るくして綠、青綠に移るに従ひ漸次暗くなり赤最も暗し、堇に至れば又少しく明るくなり、赤より黄に歸れば益々明るく

なる、之を色覺の明暗と稱す。又同じ色彩にても光度により明暗がある。例へば晝には鮮明なる赤色も、夕方には薄黒く見える、夜に入れば全く黒色となり、又極度の光線を注ぐ時は色調を失ひ白色に變ずるが如し。故に色調は光度の相違により白又は黒に變化せんとするの傾向をもつてをる。

c. 飽 和

色調及び明暗を同一に保つも、色覺は飽和の度によりて變化せらる。スペクトラムの色は純粹色にして何等の不純物を混ぜず飽和完全なり。然るに飽和不完全となれば白、灰、或は黒色を帯びる。

d. 殘 像

視的刺激消滅するも感覺が殘留する場合がある。これを殘像といふ。色及び光に關し殘像に二種ある。原刺激の去りたる

後暫時原刺激と同様の殘像が生ず。これを積極殘像といひ、積極殘像消滅の直後に現はるゝ原刺激と反對の殘像を消極殘像といふ。例へば赤色を暫時見つめたる後眼を白紙に轉する時は初め赤色の殘像現はれ次ぎにその補色たる綠色現はる。

e. 對 照

殘像は刺激なきも感覺の現存するものであるが、これとすこしく趣きを異にして刺激の排列によつてその性質の著しく強められることがある。例へば反對色なる赤と緑を別々に眺むるよりも相接して見るときは互に引き立つて見ゆるものである。かくの如く事物が互に影響してその特色を強むることを一般に對照といふ。色覺にては反對色は對照が著しい。

f. 色 盲

正常の眼は色調の全部を區別し得べしと雖も病的なるものに

あつては色調の全部又は一部を區別することの出来ぬ眼がある。これを色盲といふ。色盲には全色盲と一部色盲とがある。

十、一般感覺

a. 運動感覺

身體の運動を感ずるものでその種類三つあり。

1. 筋 覺
2. 腱 覺
3. 關節 覺

人類及び動物が運動を営む時、此等の諸感覺は通常相融合して現はるゝが故に之を總稱して運動感覺と呼ぶ。しかしその性質は壓覺に類して身體内部に起るがために内部觸覺ともいふ。

b. 有機感覺

消化、呼吸、血行等の生理的狀態を指示する感覺を有機感覺といふ。就中著しいものは饑渴の感覺である。有機感覺より生ずる意識は一般に氣持或は氣分の好し悪しとなつて現はれ、感覺生活に大なる影響を與へ、従つて吾人の行動上に重要な結果を生ずるものである。

c. 平衡感覺

身體の釣合を感ずるもので、内耳中三半規管による。

十一、感覺の強度

感覺の強度はそれを起す刺激の強度に關係して變化するものである。これに關して注意すべき項目三つあり。

a. 刺激 閾(覺閾、識閾)

初めて感覺を生ぜしむるに必要な刺激の強さをいふのである。つまりこれ以下での弱さでは感官が興奮しないのであ

る。感覺の量的下限である。

b. 刺激頂(覺頂)

これ以上刺激が強くなつても感覺が強くない點である。

つまり感覺の量的上限である。

c. 辨別閾

感覺の量的差異即ち感覺増減を知り得る最少強度差異を辨別閾といふ。即ち既に感覺があつて感覺の増減を知り得る分量である。

第二章 知 覺

知覺は一名觀念、又は知覺觀念と稱する事は既に述べた通りである。然して知覺の單位は感覺なる事も既に述べた通りである。然る

に此の感覺が結合にあらずして、融合して知覺を構成するものであるが、其の構成の仕方に二通りある。

一、感覺が不規則的に融合する場合

二、感覺が規則的に融合する場合

の二通りである。

普通の知覺は感覺が不規則的に融合して出来るものであるが、空間知覺の場合又は時間知覺の場合に於ては、感覺は規則的に融合して出来るものである。

一、内包的知覺

内包的知覺とは感覺が不規則的に融合して出来た場合の知覺を云ふ。

A. 觸感覺より生ずる内包的知覺

B. 嗅感覺より生ずる内包的知覺

C. 聴感覺より生ずる内包的知覺

二、外延的知覺

感覺が規則的に融合して出來た知覺を外延的知覺と云ふ。

A. 觸空間知覺

空間知覺を形成するに當つて、觸の感覺が主導要素となつてゐる場合は、その空間知覺を觸空間知覺と稱する。今小揚子を腕の内面の皮膚のA點に觸れさして見ると、一定の觸の感覺が起る。次に其れより少し隔つた場所のB點に小揚子を觸れさして見るが、別に前の一點に觸れた時と變りはない。然し最少し隔つたC點に觸れて見ると、前のA點とは全然異なつた觸の感覺が生ずる。茲に於てACと云ふ廣さの空間知覺が出來るのである。尙ほ盲人の場合に於ては觸覺の外に運動感覺が融合して空間知覺が形成される。

B. 視空間知覺

眼球の一番奥の網膜上に黄斑と稱する部分がある。此處は視感覺の最も鋭敏な所である。然るに其の下方視神經のある部分は視感覺の皆無の所である。視空間知覺は此の黄斑を中心とせる網膜上に於ける視感覺の融合によつて出來る事は前述の觸空間知覺の構成の場合と同じである。唯異なる點は視空間知覺の場合に於ては、眼球を左右上下する筋肉の運動感覺が伴つてゐる點である。

C. 觸時間知覺

時間知覺の構成される場合に、觸覺が其の主導要素となつて出來る場合を觸時間知覺と稱するのであるが、此の場合には外部觸覺と内部觸覺とが融合して、觸時間知覺を構成する。然し此の場合に於て外部觸覺には緊張の感情が伴ひ、内部觸覺には弛緩の感情が伴ふ事はその特色とす。

D. 聴時間知覺

A の音の次に B の音が續いて響き又 B 音の次に C 音が續いて響いて、順次斯くの如く音が規則的に繼續して響いた場合には、其處に聴時間知覺を構成するものである。

三、錯覺と幻覺

知覺の場合に於ては、時々我々は此れを其の知覺の事物よりも誤つたる知覺を生ずる場合がある。之れを錯覺と云ふ。

視錯覺の場合に於ては次の様なものがある。

- A. 方向の錯覺
- B. 長さの錯覺
- C. 大きさの錯覺
- D. 角度の錯覺
- E. 形状の錯覺
- F. 距離の錯覺

又聴覺知覺の場合に於ても、錯覺があり、又觸覺知覺、時間知覺に於ても、錯覺のある事を注意して置く。

幻覺とは刺激もなく感覺もないのに、刺激あり、感覺もあるが如き知覺の心理現象を云ふ。例へば幽靈の場合或は化物の場合の如く我々の意識には斯くの如きものゝ存在せるが如き知覺を有するも、事實に於て存在せず、従つて斯くの如きものゝ刺激も感覺もなきを以つて、之れ等を幻覺と云ふ。

四、記憶表象と想像表象

感覺が不規則的に融合する場合と規則的に融合する場合とによつて、内包的表象と外延的表象との區別を立てたが、更らに刺激、感覺、の有無によつて表象を四ツに分ける事が出来る。

(A) 知覺表象

之れは刺激もあり、感覺もあり、その感覺が融合して出来た場合

の表象であつて、眼前に事物を見た場合に於ける時の表象は、皆な悉く知覚表象と稱する。櫻の花を見た時に我々の頭の中に、櫻と云ふ觀念又は表象がある場合には、之れは櫻と云ふ知覚表象と云ふ事が出来る。現在の世界を構成せるものは、知覚表象である。

(B) 記憶表象

過去に於ける知覚表象を、現在に於て再生せしめたる場合には、之れを記憶表象と名付ける。従つて過去の世界を構成せるものは記憶表象である。記憶表象を構成する過程に四つある。

1. 記 銘

一定の表象を形成すること。

2. 把 住

過去の表象を意識内に於て一定の時間保持すること。

3. 再 生 (又復現)

聯想に依つて保持されたる表象が意識に再び表はれること。

4. 再 認

再生表象が過去の經驗の一部なる事を認めること。

5. 熟知感情

過去の經驗の一部なる事を確かに熟知せると云ふ感情を伴ふ事が必要である。

次に記憶の種類を述べれば次の如し。

一、

A. 機械的記憶(兒童の記憶)

B. 人工的記憶術

C. 論理的記憶(成人の記憶)

二、

A. 一般記憶(強度の差異を認む)

B. 特殊的記憶(個人的差異を認む)

三、

A. 記銘(新しい表象を把持すること)

B. 本来の記憶(一度把持したる表象を長く保存すること)

四、

A. 視覚型の記憶

B. 聴覚型の記憶

C. 運動型の記憶

D. 混合型の記憶

次に病的記憶を挙げれば左の如し。

A. 強記症

B. 弱記症(健忘症)

C. 錯記症

D. 記憶の幻覺

E. 虚談症

(C) 想像表象

過去の經驗を材料として、未だ經驗しない表象を構成する事を、想像表象と云ふ想像表象の内容は知覺表象と記憶表象との結合によつて出来たものである。

想像作用の過程は左の如し。

A. 舊表象の復現すること

B. 分離及減少

C. 結合及添加

想像の種類を目的によつて分類すれば左の如し。

A. 科學的想像

理知的方面に働く想像にして、學者が假説を作るのは此の想像で

ある。

B. 藝術的想像

感情的方面に働く想像である。小説家、劇作家、音楽家、畫家、彫刻家が種々の材料を集めて新しい藝術品を創作するのは、此の方面の想像である。

C. 實踐的想像

意志的方面に働く想像である。色々の業務に従事してゐる人がその目的を果たすのに、斬新なる方法を案出するのは此の想像作用に屬すべきものである。

病的想像に二種類あり。

A. 想像亢進

常人にあつても幼時期の兒童、青年、婦人、未開人、肺病患者、ヒステリー患者及精神病的體質のもの、又は精神病者、又病的虚言

者詐偽者。

B. 想像缺亡

(一時的のもの)

一般に精神作用衰弱の時に起るものである。常人も疲勞の多き場合を云ふ。

(持續的のもの)

麻痺性、老人性癡呆、

想像と人生との長所短所に就いて述べれば左の如し。

A. 長 所

1. 宗 教 上
2. 道 徳 上
3. 自然科學上
4. 藝 術 上

B. 短 所

1. 空 想

2. 妄 想

3. 邪 推

(D) 幻覺表象

幻覺の説明に就いては既に述べたるが故に茲に略す。次に種類を
擧ぐれば、

一、

A. 幻 覺

B. 幻 聽

C. 幻 味

D. 幻 嗅

E. 幻 觸

F. 幻 動

二、

A. 消極的幻覺

存在してゐるものを存在しないと見るもの

B. 積極的幻覺

存在してゐないものを存在してゐると見るもの

第三章 聯 合

聯合には感覺の聯合の場合と、知覺表象の聯合の場合がある。

一、感覺の聯合

知覺を構成する場合に感覺が聯合するに三通りある。

A. 感覺の融合作用

大抵の觀念は感覺の融合の結果生ず。

例へば、A' と云ふ觀念は a, b, c. と云ふ感覺の融合より生ずるが如し。此の場合此の感覺の内にて、どれか一つが主導要素となつて、他の感覺を壓迫禁止するものであるが、又他の感覺は其の主導要素に壓迫されながらも、趣きを添へて行く、斯くして a, b, c. なる感覺は A が主導要素となつて、統一されて新しい知覺表象が構成される。融合作用に完全融合と不完全融合とがある。

B. 感覺の類化作用

今教師が教壇にて多人數の生徒の前に講義をしてゐる場合、後方の生徒には教師の言葉は、明瞭に解する部分と解らない部分とがある。然し生徒は教師の云ふ言葉をはつきり理解し得るは感覺の融合作用に基くものである。即ち感覺が不明瞭な場合に於ては、その感覺と同じ過去の感覺を想ひ起して、それを補つて全體から明瞭なる

知覺表象を作り上げるのである。之れを類化作用と云ふ。

C. 感覺の混化作用

感覺が不明瞭な場合に於て、異種類の感覺を以つて補つて、知覺表象を構成する作用を感覺の混化作用と云ふ。

例へば短刀を見せつけられた時に、痛覺を感じ、大きな石を見た場合に、重さを感じ、梅干を見た時に、酸味を感ずるが如し。床に掛けられたる瀧の繪を見た時に、瀧の落つる音を感ずるが如きは混化作用の例である。

二、知覺表象の聯合

知覺表象の聯合には、受動的な場合と、能動的な場合とがある、受動的な場合を聯想と云ひ、能動的な場合を統覺と云ふ。

聯想には古來三種類ある。

A. 類似聯想

例へばハンニバルと云へば、シーザーとかアレキサンダーと云ふ觀念が結合して來る。

或は徳川家康と云へば、豊臣秀吉とか織田信長と云ふ觀念が結び付いて來る。之れ等は何れも類似した觀念の結合であるからして、之れを類似聯想と稱する。

B. 接近聯想

接近聯想に二種類ある。空間的接近聯想と、時間的接近聯想とは其れである。上野公園と云へば不忍池を想ひ起すが如きは、前者の例であり。春と云へば夏を、秋と云へば冬と云ふが如きは後者の例である。

C. 對比聯想

上と云へば下と云ひ、右と云へば左、善と云へば惡と云ふが如く、互に相異なる二つの觀念は比較的よく結合するものである。

之れを對比聯想と云ふ。

統覺作用を大別して二つとする事が出来る。

A. 單純統覺作用

單純統覺作用にも二種あつて、原因と結果、理由と歸結と云ふ關係を觀念の内に見出す所謂狹義の思考作用は其の一つであり、他の一つは比較作用であつて、心理内容の一致、不一致を認めて結合する場合である。

B. 複合統覺作用

複合統覺作用も大別して、總合作用と分析作用に分ける事が出来る。總合作用は概括作用であつて、一般に分析作用よりも先に行はれる。分析作用を吟味して見ると想像と悟性の働きとなす事が出来る。想像は統一的觀念の内から新に組織されたる觀念であつて、悟性作用は抽象的論理作用であつて、統一的觀念内の個々の要素を明

瞭に認識し、又之れを比較して種々の關係を確立するものである。

彼の判斷作用は之れに屬する。

聯想作用が發達すれば統覺作用となるのであるけれども、統覺作用の際に於ても、又聯想作用の働く場合のある事は注意すべき事である。我々人間の知的作用の極致は、聯想より統覺、統覺より聯想、即ち意識より、無意識の知的世界に致達する事を理想とするものである。

第四章 思 考

統覺作用を分類して總合作用と分析作用とに分けたが、此の兩者は論理學上より説明すれば思考作用と云ふ事が出来る。思考作用の表現は言語となつて發達し、又其れが文字となつて變形し、此の文字を羅列して文章となり、文章の法則を研究すれば文法となり、文

章の「あや」を研究すれば修辭學となる。

思考作用は一名判斷作用と稱す。判斷作用の要素は、概念であつて、此の概念とは又一名一般觀念又は一般表象と名付ける。觀念と概念とは、混同される事が多いからして茲に區別する必要がある。

觀 念

- 一、個別的なること
- 二、具體的なること

概 念

- 一、一般的なること
- 二、抽象的なること

今眼の前にある机を見た時に、我々の意識の中にある机と云ふ考へは、此れを机の觀念又は机の表象と名付ける。然るに此の机、彼の机、その机と云ふに非ずして、机と云ふものはと云ふ場合の机そ

のものを指さずして頭に考へた時の机は、此れを概念としての机と云ふのである。

總て我々の判断はその要素としては、觀念に非ずして概念を用ふるのである。即ち判断を分析すれば、二つの概念より構成されてゐるものであつて、その概念の一致、不一致に依つて一致の場合には、肯定判断となり、不一致の場合に於ては否定判断となるのである。又その判断の主語が部分的なる時には特稱判断となり、主語が全體を表はす時には全稱判断となる。之れを以つて思考作用、即ち判断の種類を掲ぐれば大別して四つとなす事が出来る。

- 一、全稱肯定判断
- 二、全稱否定判断
- 三、特稱肯定判断
- 四、特稱否定判断

扱て判断より新しい他の判断を導き出す事を推理作用と云ふ。推理に二種類あつて

- 一、直接推理
- 二、間接推理

直接推理とは、一つの判断より直接に他の新しい判断を導き出す思考作用を云ふ。

- a. 對當法
- b. 換質法
- c. 换位法

を含む。

間接推理とは、所謂三段論法にして、大前提が小前提の媒介によつて結論を導き出すものであつて

- a. 演繹法

b. 歸納法

c. 類推法

を含む。

第五章 知 能

一、知能の意義

個性の知的方面を知能と稱する。特に知的作用の個人差を稱してゐる。他の言葉をかりて云へば、知的特異性と云つてもよろしい。然し知能には二つの意味があります。

1. 知的素質

知的發達の可能性を知能と云ふ、此の場合には稟質と云ふ。

2. 叡知

我々が經驗の結果數多の内容を取り入れた知的個性を云ふ。

3. 材 能

之れは實際問題を適當に處理し得る能力にして、知能と性格との結合と見る方が適當である。

二、知能の内容

1. 知覺作用

2. 注意作用

3. 聯想作用

4. 記憶作用

5. 想像作用

6. 思推作用

7. 學習作用

三、知能の性質上の標式

1. 知覺の標式

此の標式に當る人は、物を見るに其のものを有りの儘に見る、即ち知覺觀念としてのものゝみを見る癖の人である。

a. 分析型

b. 綜合型

2. 注意の標式

此の注意の標式に於ては集中性、持續性、期待性、分配性及意志の強弱が關係する事が多い。

3. 記憶の標式

想像作用と云ひ、理解作用と云ひ、何れも記憶作用がその根本的位置にあるものである。然し此の記憶作用をよく調べて見ると、聯想作用と統覺作用の二方面のある事に氣が付く。

a. 聯想的標式

1. 視覺標式

2. 聽覺運動標式

3. 觸覺運動標式

b. 統覺的標式

1. 純粹記述標式

2. 觀察標式

3. 情緒的標式

4. 學習標式

c. 天才的標式

天才的標式とは記憶の働き方は、聯想的標式によるか、或は統覺的標式によるか、或は二つを結合した働き方によるのであるけれども、その働き方が電光石火の勢であつて、即ち非常に早いのである。此の速かなる想ひ起し方は勿論練習の結果そう云ふ風にもなるけれ

ども、又其の人の生れながらの知的素質である事が多いのである。
語學や數學の天才には此の標式の人が多い様である。

四、想像の標式

- a. 具體的想像
- b. 抽象的想像
- c. 豊富なる想像
- d. 貧弱なる想像
- e. 批判的想像
- f. 無批判的想像
- g. 直觀的再生想像
- h. 直觀的構成想像
- i. 抽象的構成想像

五、思惟の標式

此の標式の根本的なるものは、分解、綜合の二標式である。前者は鋭敏なる智見と論理的區別の能力の優秀が其の根柢になり、後者は思想の結合能力の優秀と深き智見に、基礎を置いてゐる。

六、知能測定法

知能の分量上の差異、即ち知能の優劣の程度を定め様とするを云ふ。

第六章 知能異常

常態の知能所有者を標準として知能の異常者には、それより上位にあるものと下位にあるものがある。聖人、哲人、賢人は前者に屬し、低能者、犯罪者は後者に屬するものである。

低能に就いてはその研究者によつて種々の區別が施されてゐる

が、大抵次の三種類に區分する事が出来る。

(1) 白痴

之れは心的年齢の二才位の發達程度に止まるもので、言語を以つて充分に思想の交換の出来ないものである。

(2) 痴愚

之れは心的年齢が六七才位の發達程度に止まるもので、言語で思想の交換が出来るが、文字では出来ないものである。彼等は皿を洗つたり、小用をなすが如き簡單なる仕事は出来るものである。

(3) 魯鈍

之れは心的年齢十二、三才の發達程度に止まるもので、文字を辛ふじて使用し得るものである。働く事も出来、簡單な機械を動かす事も出来るが監督を要するものである。

然し以上の低能者は精神的方面の全部の缺陷者と見る事が出来る

が、此の外に精神の一部分は割合に發達してゐるけれども、他の多くの部分が頗る劣等なるものがある。天才の如きは寧ろ精神の一方面のみが非常に發達してゐて、他のあらゆる方面は殆んど低能者と變らない様な人々がある。特に藝術家に於て之れを見る様である。然し天才にも殆んど總ての學科や作業に對して優秀なるものと、ある特殊の方面、例へば音樂、圖畫、數學等に優秀なるものゝある事は注意しなくてはならない。

尙ほ低能者に共通な知的方面、感情的方面、意志的方面の叙述をなせば次の様である。

(1) 知的方面に就いては、其の注意が不安定で知覺は不確實で、記憶や觀念の聯合作用等は、何れも皆薄弱で、事物に對する興味を缺いてゐる。従つて正確な比較や分析や判斷や推理や綜合や抽象が出来ず、思考力は不充分となり、その觀念界は多く具體的の

生活關係に於ける事物に限られ、思想は淺薄となり、作業は繼續して行ふ事が出来ない。

(2) 感情的方面に於てもその發達は、頗る低く普通人の有する様な宗教的、美的、倫理的の高等なる情操が十分に發達しないで、唯動物的感情と云はれる様な憤怒とか、怨恨とか、嫉妬とか、複讐と云ふ様な情緒は相當に發達してゐるのみならず、斯る情緒が、却つて普通以上によく發動し、その昂進の程度の著しい場合もある。

(3) 意志の方面は、抑制作用が十分に發達してゐない爲めに、衝動的に行爲をなし易く、相當な理由を認め、又その場合を考慮して行ふ事が出来ないのである。

尙ほ普通の状態に於ては、低能者でない者も、その時に觸れ、折に觸れて低能者となる事がある。子供に對する親の心理状態の如きは之れである。

第三編 情意活動

第一章 感情

一、感情の意義

意識の客觀的要素は感覺であるが、意識の主觀的要素は情意的方面である事は前に述べた通りである。然るに此の情意的方面の最も單純なものは感情であつて、之れを心理學では單純感情と稱する。單純感情は又名感覺感情とも稱する感情であつて、之れは感覺に伴ふ感情であるからして、斯く名付けたものである。

感情の種類左の如し。

- (1) 單純感情
- (2) 複合感情

(3) 情 緒

(4) 情 操

(1) 單純感情

從來の心理學者は單純感情の性質を、快、不快とのみ區別したのである。然るにヴントによれば、感情には無数の質的差異があつて、之れを三つの型或は方向に大別する事が出来ると云ふのである。

A. 快、不快の方向

B. 興奮、沈靜の方向

C. 緊張、弛緩の方向

そして一つの單純感情は、之れ等の中で、一つの方向に屬するものもあれば、又同時に二つの方向、或は三つの方向に屬してゐる事もある。一般に快、不快の方向の感情は下等感覺に伴ふ事が多い。又興奮と沈靜の感情は、主として高等感覺に伴ふ感情である。赤い

花を見れば興奮の感情を惹き起し、青い空を見れば沈靜の感情を惹き起し、調子の高い音樂に接すれば興奮の感情を生じ、調子の低い音に接すれば、沈靜の感情を引き起すが如きは此の例である。又緊張と弛緩の感情は、主として主觀に關係してゐる。我々の意識が一つの對象物に集中する時起き、或は何か起りはしないかと豫期してゐる時起る氣持は緊張である。殊に理知の働きを營んでゐるときの感情は、快でもなく不快でもなく、興奮でもなく沈靜でもなく、緊張の状態と云ふ事が出来る。

尙ほ感情の此の三方向に就いて我々の注意すべき點は、快の感情が不快となつたり、又興奮が沈靜となつたり、又緊張が弛緩となつたり、その時に應じて相互に變化する事はあるけれども、快の感情が沈靜となつたり、興奮の感情が弛緩となつたりすると云ふ事はないのである。

ヴントの感情三方向説に對して、ロイスと云ふ人は單純感情の性質を快、不快の外に、安靜、不安の方向のある事を力説して、感情の種類を次の如く四つに分けてゐる。

- A. 快で安靜的な場合
- B. 快で不安的な場合
- C. 不快で不安的な場合
- D. 不快で安靜的な場合

要するにロイスの説はヴントの三方向説から思ひ付いた考へであつてヴントの三方向の内、緊張と弛緩との方向を取り去つたものと思はれる。然しながら次の表によつても解るが如く、感情と生理的變化との關係に於ては、六種類に分ける事が出来るを以つて、ヴントの感情三方向説の方が妥當なるものなる事が證明せられるのである。

		呼	吸	脉	搏
快		速	弱	遅	強
不	快	遅	強	速	弱
興	奮	速	強	中	強
沈	靜	遅	弱	中	弱
緊	張	遅	弱	遅	弱
弛	緩	速	強	速	強

最後に感情の本質に就いて一言せん。

感情の本質に就いては、古來の學者の説を大別すると大體三つある。

a. 知的感情説

此の説に依れば快の感情とは肯定判斷にして、不快の感情とは否

定判断なりと云ふものである。ギリシヤのアリストートルは此の主張者である。又オルフの如きは完全なるもの、認識が快であつて、不完全なるもの、認識が不快であると考へた。然し乍ら判断とか認識に伴ふものが快又は不快の感情であつて、判断又は認識其れ自身が感情であると認むるのは間違つた考へである。又ヘルバルトなどの如きは、表象の結合される場合は快の感情であつて、表象の結合を妨げられる場合は不快の感情なりと稱して居りますけれども、前にも述べしが如く、單純感情は感覺に伴つてゐるものであつて、ヘルバルトの如く表象の結合のみに感情が伴つてゐると見るのは之れ又誤つた考へと見る事が出来る。

b. 生理的感情説

此の説に依れば、感情を生理學的に説明せるものであつて、ミュンスターベルクは筋肉の收縮した場合を快の感情となし、筋肉の弛

緩した場合を不快の感情と考へてゐる。然し此の學説の最も有名な力説者はゼームスとランゲの二人である。ランゲに據れば、血管が收縮する時には不快を生じ、血管が張開する時には快の感情が生ずると考へたのである。又ゼームスは身體の種々なる表出運動、即ち生理的表情運動の結果として感情が起きると考へた。ゼームス曰く「悲しいから泣くのではなくして、泣くから悲しいのである」と顔が歪み涙が流れ嗚咽し、心臓の動悸が烈しくなり呼吸が忙しくなつて、その結果悲しい氣分となると云ふのである。此の學説は一見笑止すべきもの、様に考へられるけれども、その根據を吟味すれば、少なからず首肯すべき點がある様に思へる。即ちアルコールの如き薬品を用ひて生理的變化を生ぜしむる時、精神的變化の生ずるが如きは實際の經驗に於て吾人の認めて居るところである。然し心理的過程が必ずしも生理的過程の結果と考へられない場合があると云ふ

事は、此の學說の難點と云はなくてはならない。要するに生理作用と感情とは、同時的、交互的に相關關係を持つてゐるのであつて、其の表はれる場合によつて一方が先づ著しくなるのであると見るのが正當な見解であらう。

c. 目的論的感情説

此の説は生理的感情説に生物學的意味を付けたものである。之れを以つて進化論者に此の説を主張する人が多い。即ち我々の有機體の生活活動を助けるものは快の感情であつて、生活活動を妨げるものが不快の感情なりと云ふのである。然し乍ら我々の注意すべき點は生活活動の動因たる感情そのものを、生活活動と同一視するのは、穩當なる解釋と見る事は出来ない。

扱て二十世紀に至つて、感情の本質に就いて種々の意見を述ぶるものが出来て來た。その學說は三つある。

- a. 感情を普通感覺と對立せるものと見る説
- b. 感情を以つて感覺の屬性と見る説
- c. 感情を以つて特殊の感覺に過ぎないものと見る説

然るに尙ほ此處に特筆すべき感情の説明に、ゼームスの感情獨立説がある。之れは我々が人の名や物の名を想ひ出そうとして、しかも未だ何も想ひ出してゐないが、正にそれが想ひ出されんとしてゐる様な場合には、我々は何等の心像をも想ひ浮べてゐないが、明らかに一種の名狀する事の出来ぬ氣持がある。此の状態をゼームスは名付けて空隙と稱してゐるが、此の空隙は單なる空隙ではない、非常に活動的な空隙の状態である。その證據には若し或る觀念が意識の内に浮んで來た時には直ちに之れは間違つてゐると判斷するか、又は確かにそれに相違ないと想ふ。意識の内に種々浮んで來るところのものに就いて、それを撰擇する働きがある。要するに或る方向

を持つてゐる意識と云ふ事が出来る。ゼームスは又之れを傾向の感情とも稱してゐる。ゼームスは斯くの如き全く感覺及觀念よりも獨立した感情を説いてゐる事は、近世に於ける感情説の珍らしく、且つ興味ある問題と云はなくてはならない。

最後に感情と知的判断との關係に就いて一言せん。判断作用は思考活動の最根本的なものであるが、其の根柢には表象内容の承認又は排斥が存する。此の承認又は排斥は要するに一種の感情であつて、ヴェンデルバンドは之れ等を是認の感情、否認の感情と名付けてゐる。

感覺と單純感情の差異

一、感覺の質は最大差異によりて限られてゐる。即ち其の強度は零より初まつて最大強度に達する。然るに感情は最大反對によりて限られる。即ち無關心から相反せる方向に變ずる。従つて感覺の性質の間には差異はあつても反對と云ふ事はない。反對の様に見える事

があつても、それは感覺に伴ふ感情が對立するからである。

二、簡単な分析する事の出来ない感情は獨り簡単な感覺に伴ふばかりでなく、感覺の融合から生ずる複雑なる表象にも伴ふ。従つて單純な感情は單純な感覺よりも、その數は遙かに多い。

三、純粹感覺はそれで相互に獨立して、その要素の間に、何等關係のない多數の系統を作つてゐる。即ち感覺の性質は相互に乖離的であるが、感情は唯一つの相聯關せる多様を作つてゐる。以上の三點が感覺と感情との區別さるべき特色であつて、その理由は要するに感覺は意識の客觀的要素であり、感情は意識の主觀的要素であるからと云はねばならぬ。

2. 複合感情

感覺が融合して觀念となつた時、感覺に單純感情が結び付いてゐる爲、觀念にも數多の單純感情が結合されて居る。此の觀念感情を

複合感情と云ふ。複合感情の種類は左の如し。

一、一般感情

之れは下等感覺の結合の場合生ずる複合感情である。一般感情には快、不快の感情が最も強く表はれる。そして一般感情の特色は客観性よりも主観性の方が強い事である。我々は一般感情の事を一名快樂の感情、不快樂の感情と呼んでゐる。之れは單純感情の快と不快とを區別せんが爲めである。

二、知覺感情

之れは一般感情と異なりて、視覺又は聽覺と云ふ高等感情に結び付いて居る單純感情が結合する際生ずる複合感情であつて、此の際も單純感情の内、快不快の感情が優勢を占めてゐる。然し一般感情に比較すると主観性よりも客観性の方が強い様である。知覺感情を一名快喜感情、不快喜感情と稱す。知覺感情の種類左の如し。

1. 内包的感情

A. 調和感情

- a. 色彩の調和感情
- b. 音響の調和感情

2. 外延的的感情

B. 空間的形狀に附隨する形態感情

- a. 配合感情
- b. 割合感情
- c. 比例感情

C. 時律感情

色彩の調和感情

一、二色配合の調和感情

- (1) 原色の調和感情

原色とは赤、黄、青の三色であるが、此の三色の二色配合に於ては、赤と黄、青と黄は調和感情を興へるけれども、赤と青は調和感情を表はさない。

(2) 間色の調和感情

赤と黄を混すれば、橙色となり、黄と青を混すれば、緑となり、青と赤を混すれば紫となる、橙色、緑、紫此の三つを間色と稱す。橙色と緑も、緑と紫も、紫と橙色も、何れも調和感情を興へるものである。

(3) 反対色の調和感情

色彩圓に於ける對角線上の二色を、反対色と云ふ。六色々彩圓に於ては、反対色は三組ある。赤と緑、紫と黄、青と橙、何れも反対色としての調和感情を示すものである。然し反対色の調和感情六色々彩圓よりも八色々彩圓、八色々彩圓よりも、十色々彩圓、十色々彩圓

よりも十二色々彩圓の方が調和感情を表はすものである。

尚ほ色彩圓以外の反対色として黒と白と云ふ反対色は之れ又調和感情を呈するものである。従つて白と其の他の色との配合も調和感情を表はし、黒と其の他の色の配合も調和感情を示すものである。

(4) 原色と間色との調和感情

赤と紫、紫と青、青と緑、緑と黄、黄と橙色の如き互に相類似せる二色の配合は、之れ又調和感情を表はすものである。但し此の場合に於て赤と橙色は例外と云はなくてはならぬ。

(5) 同次色の調和感情

之れは一名濃淡感情とも云ふ。赤と桃色、青と薄青、紫と薄紫、緑と濃緑等は調和感情を示す第一の部類に屬す。然し桃色と薄橙色、薄橙色と薄青、薄紫と桃色の如きは、第二の部類に屬する調和感情であり、桃色と白、薄紫と白の如きは、第三の部類に屬する色彩の

調和感情と見る事が出来る。

(6) 銀色又は黄金色と其の他の色の配合

如何なる色彩と雖も、それ等と銀色、又は黄金色と配合される場合は、美的調和感情を示す。

概して濃厚な色彩の配合よりも、稀薄な色彩の配合の場合が美的調和感情を表はすものである。

音響の調和感情

一、自然の調和音

二、音響の調和音

a. 協和

b. 不協和

協和の條件

1. 單純性

協和音にあつては差音が少なく、且つ其の振動数の比例が單純でなければならぬと云ふのである。

2. 規則性

二つの音の振動数は規則正しい比例關係をなしてゐなくてはならぬこと。

3. 統一性

之れは二音の融合が完全なる時が協和する事を意味するのである

4. 分化性

之れは二つの音が協和する場合に、若しその二調音が繼起的に結合する場合には、共通の上音が分化し、二調音が同時に結合する場合には共通の基音が分化せられて、之れが吾人の意識に兩音の類似せる事を認めしめて、二音の協和の感じを生ぜしめると云ふのである。前者の場合を直接類似と稱し、後者の場合を協和の間接類似と

稱す。

形態の美的感情

1. 曲線感情

a. 自然の曲線

b. 人工的曲線

2. 比例感情

a. 相稱又は均齊

或る物を中心として右左に同じ形を並べる時には美的調和感情を表はす。

b. 黄金分割

縦と横との比が縦と横と加へたものと、縦との比に等しい様に分割する場合には、美的調和感情を示す。但し此の場合に於て縦は横よりも長さを大なりとす。郵便端書菊版の如きは此の通例である。

c. 平衡

或る物を中心として、右左に大小重輕のものを並べた場合は、或る物を中心として左右に同じ物を並べた時よりも、美的調和感情を與へるものである。

3. 反復的類型感情

ゴシック式の建築や三重塔の場合の如く、同類の型が反復される場合には美的調和感情を與へるものである。

時律の感情

今二つの音を組合せる場合に於て、時間の長い音と短い音とを互に組合せる時は、長い音のみの組合せよりも又短い音のみの組合せよりも一層よい感じを與へる。即ち我々はトーン、トーン、トーンと云ふ場合よりも、トン、トン、トンと云ふ場合よりもトーン、トン、トーン、トン、トーン、トンとした場方が心持がよい。彼の和

歌、俳句、新體詩などの七五調などは最も此の關係をよく示してゐる。概して短長格は人の心を興奮させ發揚する。然し長短格は悲哀の情を催さしめる。又短長短格は輕快の心持を興へ、短々長格は進取的な攻撃的な氣分を興へる様である。

又音の強弱關係によつても、その調和の程度に關係する事が多大である事を注意して置く。

第二章 情 緒

一、情緒の意義

普通我々が感情と稱してゐるものは、心理學上に於ては、情緒と名付けるのである。

意識内に幾つもの觀念が繼續的に表はれて行く時には、複合感情

も繼續的に續いて表はれるものであるが、その中で最も有力な感情の統體を情緒と云ふ。情緒は其の強度が強いものであるからして決して長く續くものではない。必ずや時間の經過と共に弱くなつて來るものである。此の弱くなつた場合を情趣と云ふ。喜怒哀樂は普通我々は感情と稱してゐるけれども心理學上情緒であつて、此の哀樂は情趣と云ふ事が出来る。

二、情緒の内容

情緒の内容は別に單純感情以外のものに、之れを求める事は出来ない。即ち單純感情が快、不快、興奮、沈靜、緊張、弛緩の三方面を有してゐる以上は情緒の内容も、又之れ以上に出る事はない。然し此の三方面の内どの部分が、その主導要素となつてゐるかによつて、大體情緒を二種類に分つ事が出来る。即ち第一は快、不快が優勢を占めてゐる情緒で、第二は緊張、弛緩が優勢を占めてゐる情緒

である。前者に屬するもの、内には、快の方では、喜悅とか満足の情緒であり、不快の方では悲觀、厭惡、煩悶、憤怒の情緒である。又後者に屬するものは希望などは快の要素を含んでゐる緊張的情緒であり、恐怖、心配等は不快の要素を含んでゐる緊張的情緒である。而して之れと正反對の弛緩の情緒には驚愕とか失望等の情緒を數へ擧げる事が出来る。如何なる情緒と雖も興奮と沈靜の感情を存せざるものはなく、他の二方向感情の各々は時になくとも、此の興奮と沈靜の感情のみは存在してゐる。そして情緒が強まる時は興奮的となり弱まる時は沈靜的となる。之れを以つて情緒の強度を決定するものは、此の興奮、沈靜の二感情に依つてゐる事を忘れてはならない。

三、情緒流動の形式

情緒流動の形式は大體二種類に分つ事が出来る。

1. 歡喜や憤怒などの様に急に高まつて徐々と弱る形式
2. 希望、恐怖の如く徐々と高まつて、急に弱る情緒
3. 波動的情緒
4. 間歇的情緒
5. 交替的情緒

四、情緒と觀念との關係

又情緒は我々の心の中に現はれて來るところの觀念の進行に、大なる變化を與へるものである。即ち希望の情緒の時には、情緒の強さが高まるに従つて觀念を續出せしめるのが其の本質である。然し又恐怖とか驚愕の情緒の如く、餘り恐れた結果或は非常に叱驚した結果強い情緒の爲めに、觀念の進行が妨げられ、時には觀念が全然その續出を止められて仕舞ふ事さへある。兎に角觀念の進行に變化を與へる事が情緒の本質の一方面と見る事が出来る。

五、情緒の表出

情緒は又單純感情と同じ様に我々の生理的方面に大なる變化を與へる。之れは單純感情の場合よりも劇烈である。情緒の表出の主なものは左の如し。

1. 呼吸の變化
2. 脈搏の變化
3. 血管の伸縮(赤くなつたり、青くなつたりする)
4. 腺分泌の變化(唾液、汗等)
5. 消化器の活動の變化
6. 顔面及全身の筋肉運動及戰慄
7. 言 語

情緒流動の變態

1. 純粹強度的徵候

情緒の強度が高まる時には、身體の運動は劇烈になるけれども、時によつては餘り強い爲めに、運動が突然禁止されて仕舞ふ様な状態がある。之れを純粹強度的徵候と稱す。

2. 模 擬 運 動

以前快の感情の時現はした表現法を、快の感情が主導要素となつてゐる喜悅の情緒の時繰返して模倣する表情運動である。その他恐怖の情緒の際は、且つて苦味や酸味を味はつた時現はした顰め顔を再び現はして、模擬運動としての表情運動を示すものである。

3. 觀念の發表

a. 指 示 身 振

情緒が高まると情緒の對象物を指し示す身振りをする様な事がある。

b. 叙 述 身 振

一心不乱に演説でもしてゐる時には、その話しの中に出て来るものを説明するに、奇妙な手真似を以つて示す様になつて来る。

第三章 情 操

一、情操の意義

意識の知的方面の極致は、統覺的結合に於て其の結果を完ふするに對して、意識の感情方面は此の情操に於て、其の極致を見出すのである。總て我々の意識に於て數多の觀念が統覺的に色々組合されて來ると單純感情とか、複合感情とか、情緒とかとは異なつた、更らに一層純化された高尚な感情が生じて來るのである。之れを他の感情と區別して情操と稱す。換言すれば、情緒、情趣等の感情が知

識とか智慧の働きによつて精練されて出來た高等感情と見る事が出来るのである。

二、情操の種類

a. 論理的感情

論理的判斷に伴ふ感情である。

b. 倫理的感情

道徳的判斷に伴ふ感情である。

c. 法律的感情

法律的判斷に伴ふ感情である。

d. 宗教的感情

宗教的判斷に伴ふ感情である。

e. 高等なる美的感情

藝術上或は文藝上の作物或は天地山川等の複雑なる美に對する感

情は高等なる美的感情と稱さなくてはならぬ。何故なれば高等なる美的感情には單純感情以外に、精神的要素のその他のものが混入されて居るからである。種類左の如し。

1. 優 美
2. 壯 美
- 條 件
- 無 限
- 嚴 正
- 荒 大
- 怪 異
3. 滑稽 美
4. 悲 壯 美
5. 「さ び」

三、美意識の特質

心の知的作用の理想は眞意識であり、心の意志的作用の理想は、善意識である。従つて心の感情的方面の理想が美意識である事は云ふ迄もない事である。次に美意識の特色を説明せん。

1. 美意識の第一條件は客觀的標準のないことである。眞意識に於ては、客觀的標準を要求するけれども美意識に於ては、主觀性が強いのである。従つて眞理は誰しも承認すべきものであるに對して、美意識は他人の如何にかゝはらず自己のみ之れを認めて差し支へなきものを云ふ。

2. 美意識は感情中の快感なるものである。快感が必ずしも美意識となるものでない事を注意して置く。

3. 美意識は無關心性を有す。英國の心理學者ペインが「吾人は快感の外、直接に如何なるものをも與へない感情であつて、生活上の

利害と掛け離れて美そのものを楽しむのが美意識である」と云つてゐるのは、此の意味である。即ち認識作用を排斥するのも美意識であり、意志の働きを斷滅するのも美意識である。實に美なるものそのものの中に、溶け入る事が美意識の特質である。

4. 美意識の著しい性質は、その快感が心身の一局部に止まらずして、心身の全體に著しく行き渡つて居る様な心持のする事である。此の證明は美意識でない快感の場合を引き合ひに出せばよく解る。寒い冬の夜炬燵にあたつてゐる時の快感は、例へ同じく快感を與へると雖も美意識と云ふ事は出来ない。然し美意識の場合に於ては、感覺器官に於て感ずる快と心身全體に於て感ずる快との間に著しい區別のない事である。美妙なる音樂を聴く場合とか麗はしい景色を見る場合にはその感覺器官の存在を忘れる程迄に、快感を感ずるものである。實に美意識の時は心身全體が美的感覺器官たるの心持ち

がする。

5. 美意識はその快感が普通の快感に比較して弱い事である。弱くなければ心身の全部に等しく行き渡るものではない。今小説を比較的長く讀んでも其んなに疲勞は覺えないけれども、自然科学の書物を読む時は、少時間であつても相當疲勞を感ずるのは、前者の場合は強さの弱い快感を與ふるに反して後者の場合は比較的強い快感を與ふるからである。

6. 美意識は客觀化され易い特徴を持つてゐる。即ち美意識と云ふ主觀的意識を外部に存在するものゝ如く認むるのである。即ち感ずるものゝ我なる事を打ち忘れて美意識を外物の客觀的性質と感ずるのである。

7. 美意識は又恒久的再現性に富む、之れは美的快感の永續性を示すものである。

8.最後に美意識の特質として功利と一致する場合の多い事を擧げる事が出来る。美意識はその動機に於ては、功利的要素を許さざるも、結果に於ては功利と一致する場合が多い。下等感覺の與ふる快は我々の心身を害する事が屢々ある。美しい景色を見たる爲め頭痛を生じたとか、美妙的な音樂を聽いて胃腸を害したと云ふが如きは絶對にない事である。美音、美形は却つて人の精神を爽快ならしめ心身の活動を敏感ならしめるものである。

第四章 意 志

一、意志の意義

心理學上の意志は、倫理學上の意志、哲學上の意志、生理學上の意志とも異なつてゐるものであつて、感情と説くのがその特色である。

扱て情緒は一度強まるや、その状態は永續せずして情趣となるものである。斯くの如く情緒が時間の経過と共に變化する状態に三種類ある。

1. 甲の情緒は一時はその強度も強くあつても時間の経過と共に段々弱くなつて消滅して行く場合。
2. 又甲の情緒が乙の情緒へと變化して行く事もある。
3. 然し我々の情緒は時に突然に、且つ完全に終りをつげる事がある。

此の第三の場合を心理學上の意志と名付けるのである。例へば飢の感情が起つた場合でも、此の不快の感情が段々時間の経過につれて強度を増し、遂には不満或は苦しみの情緒に變化する事がある。その時此の飢の感情が食物を得ずして、其の儘消滅して仕舞ふ事もあるが、又此の不満苦しみの情緒が、悲しみと云ふ情趣となつて來

た時、誰れか或る人が来て慰めでもすると、その人の情趣は悲しみから快の感情それから、沈静或は安心の情緒へと變化する事もある。然し不満苦しみの情緒の極に達した時は、此の不快を或る手段によつて突然に除去して仕舞ふ事がある。此の様な場合を心理學上意志行爲と名付け、それ以前の狀態を意志過程と稱するのである。意志行爲をなさしむるものは、意志過程中に於ける努力感情であつて、その努力感情の中には、又二つの要素があつて意志行爲をなさしめるものである。その一つは運動理由と稱する觀念的要素と衝動彈力と稱する感情的要素であつて、意志過程中に含まれたる努力感情は、或る一つの目的的觀念によつて動かされるものであるが、心理學上茲に注意すべき點は、此の努力感情が意志行爲となるのには必ずや一種の感情が大いに力を與へるものである。要するに心理學上の意志は、一種の感情の流れと見る事が出来る。

二、意志の種類

動機の数によつて意志を區分すれば三つとなる。

1. 單純意志行爲

動物や兒童や未開人の意志行爲は、その動機が一つに限られてゐる。斯くの如き意志を單純意志行爲と稱す。

2. 複合意志行爲

複合意志行爲は一名有意行爲とも稱するものであつて、動機の数に數多あつてその内から一つの動機を撰んで意志行爲となす場合である。此の際生じた感情を決意の感情と稱する。

3. 選擇意志行爲

數多の動機があつてその内から二、三の動機を選擇し、最後に又一つの動機を選擇して意志行爲をなすものを選擇意志行爲と云ふ。此の際生じたる感情を決斷感情と稱する。我々人間の知的能力が進

歩發達して來ると、動機の数が増え、その選擇の仕方も數回繰返されて、最後に一つの動機を選擇するに至るものである。

大體我々の意志の發達は以上の如く三つの段階を経るものであつて、此の單純意志行爲より複合意志行爲選擇意志行爲に至る段階を意志の進歩的發展と稱するのである。然るに選擇意志行爲はそれで終るべきものではなくして、此の訓練が發達すれば選擇意志行爲は複合意志行爲となり、又複合意志行爲の訓練は、單純意志行爲となり、最後には意志が習慣的反射運動となるのである。此の状態を意志の退化的發展と稱するのである。藝術家が初めは機械的にやつてゐたものが、後には努力的となり、その努力的訓練が積むと最後には習慣的機械的となるのも此の意志の退化的發展に外ならないのである。孔子が七十歳にして己れの欲する所に從へども矩を越へずと申されてゐるのは、此れ又意志の退化的發展の實例である。倫理學

上の品性とは、道德上の意志の退化的發展を云ふのである。

三、性格の異常

知能の異常は低能者に於て之れを見しが如く、性格の異常は之れを犯罪者に於て見る事が出来る。次に犯罪者の特徴を掲げて見れば下の如し。

1. 生理的方面の特徴

- a. 狭き前額
- b. 殺げた前頭
- c. 下顎の過大
- d. 耳縁の上部の巻き込まざる
- e. 鼻孔大にして小鼻の大なる
- f. 爬蟲類などに見られる口蓋齒に相當する凹凸襞ある口蓋
- g. 著しく發達せる犬齒

- h. 肋骨の過多又は過少
- i. 副乳
- j. 尾骶骨の異常に長さ
- k. 額面の不對稱
- l. 耳の變形
- m. 胸部畸形
- n. 齒列異常
- o. 扁平足
- p. 女にして髻の多き

2. 精神的方面

- a. 痛覺遲鈍
- b. 天候に關する感覺の鋭敏
- c. 鋭き視力

- d. 下等な動物などに對する溺愛
- e. 強い虚榮心や復讐心
- f. 後悔の念のなき
- g. 殘酷性
- h. 規律的勞働の嫌惡
- i. 極端な妄想
- j. 感情活動の異常
- k. 知識の極端な不整的發達
- l. 意志活動の薄弱竝に變態

尚ほ普通の性格を持つてゐる人でも、次の様な場合に犯罪者と同じ異常性格となる。

- a. 生活上の窮迫
- b. 感情の激奮

- c. 模倣的犯罪者
 - d. 利慾に迷へる時
 - e. 焦心狼狽せる時
 - f. 強き刺戟に接せる時
 - g. 沮喪時と發揚時
 - h. 迷信せる時
 - i. 夢遊時
 - j. 空腹時
 - k. 月經時
 - l. 妊娠時
 - m. 産褥の時
 - n. 未知及び誤解
 - o. 不正又は不良の錯誤
- } 特殊なる精神状態
- } 特殊なる生理状態
- } 錯誤による犯罪者

- p. 復讐的犯罪
 - q. 利他的犯罪
 - r. 政治的犯罪
 - s. 宗教的犯罪
 - t. 迷信的惑溺
- } 利他的犠牲的感情

第五章 素質

素質の事を一名氣質と稱する。個性の情的方面である。扱て素質を分つて左の四つとなす。

1. 膽汁質
2. 憂鬱質
3. 多血質

4. 粘 液 質

1. 膽 汁 質

胆汁質の人は例を挙げれば、事務家とか、實業家、政治家又は古來の英雄豪傑の如きものを云ふ。此の素質の人は人を眼下に視る傲慢不遜のものであつて、一度決心した事は如何なる事があつても之れをやり通すと云ふ様な素質を持つてゐる人である。又此の素質の人は精氣が充滿し客觀的事情に對しよく處理する性質を持つてゐる特徴を有す。

2. 憂 鬱 質

憂鬱質は一名神經質とも稱する。天才肌とか學者肌とか詩人肌とかと云つた様なものであつて決斷力には乏しいが、そのかほりに智力や想像力に富む素質の人である。従つて感ずる事に強く一度感情に捉へられると容易に脱しない。そして行動を外面に表はすよりは、

寧ろ内面的、思索的である。そして此の素質の人々は團體を好まず、孤獨生活を楽しむ様である。彼の詩人とか文藝家の中に厭世自殺をする人の多いのも、此の憂鬱質の人の其の内に多いが爲めである。尙ほ神經質は男子よりも女子の方に多い様である。然し又考へ様によつて女子より男子の方に、女子以上の神經質の人のある事は注意しなくてはならない。

3. 多 血 質

大體人生の内では十七、八歳から二十六、七歳位迄は、此の素質が概して一般的に現はれる様である。一口に云へば此の多血質とは才子風とでも云ふべき素質の人で、感情の方から云ふと感易く、激し易く、心が移り易い、従つて常に快活であり、敏活である。そのかほり忍耐力はなく、輕薄である。少しも落着いて仕事をする事の出来ない人である。運動感覺を喜ぶ達の人である。然しよい方面

では社交的であつて、憂鬱質の人の様に主観的に物を考へず客観的に物事を考へる傾向の人である。即ち外界の變化に對して、直ちに反應する人である。

4. 粘 液 質

此の素質の人は感情に激せられる事が稀れであつて、従つて感情の變化も乏しいものである。靜肅にして辛抱強く慎重に利害得失を計算した後でない物事を實行しない。然し一度定めた事は、外界の毀譽褒貶にかゝはらず貫徹せんとする方面は、その長所であるけれども卑屈であるとか、無氣力であるとかの短所もある。同じく英雄であつても、徳川家康などはその適例である。

尙ほ此の素質の四分法をもつと通俗的な言葉でもつて表はす時には、

1. 短 氣(膽汁質)

啼かぬなら殺して仕舞へ、ほとゝぎす。

2. 陰 氣(憂鬱質)

啼かぬならわけでもあらう、淋しからう。

3. 陽 氣(多血質)

啼かぬなら啼かして見よう、ほとゝぎす。

4. 平 氣(粘液質)

啼かぬなら啼く迄で待たう、ほとゝぎす。

又此の素質が外部の刺激に對する反應の方から區別すると、

1. 膽 汁 質

速にして強

2. 憂 鬱 質

速にして弱

3. 多 血 質

遅くして強

4. 粘 液 質

遅くして弱

又次の表の示す様な區別もある。

- | | | |
|-----|---|------------------|
| 不 快 | } | 1. 膽 汁 質——現在を重んず |
| | | 2. 憂 鬱 質——未來を重んず |
| 快 | } | 3. 多 血 質——現在を重んず |
| | | 4. 粘 液 質——未來を重んず |

従つて厭世家には胆汁質憂鬱質の人多く、樂天家には多血質粘液質の人が多い様である。

尙ほ此の素質と年齢とに付いて吟味するに、少年時代は多血質で陽氣であるが、青年時代となると憂鬱質又は神經質となつて陰氣となる。又壯年時代となると胆汁質となつて短氣となり、老年時代と

なると粘液質となつて平氣となる。そして尙ほ我々の注意すべき點は大抵の人が二種の素質を持つてゐる様である。之れを性別にしても女子は多血質と神經質とを有し男子は胆汁質と粘液質とを有する様である。然し最後に我々の注意すべきは古來の聖人とも云はれるべき人々は、大抵此の四種の素質を兼有して居つた人が多い様である。否な寧ろ此の四種の素質を充分發揮した人が、古への聖人、哲人であつた様である。釋迦も孔子もキリストも皆此の四種の素質を充分發揮した人の様である。此の點は又非常に我々が興味を以つて研究すべき點であらうと思ふ。

素質と意志との關係

一、多血質の人の意志的反應は弱い、即ち此の素質の人は現在の外部刺激に對して軽く動かされ易い傾向を持つてゐるからである。

二、胆汁質の人は意志的反應は前者に比較して餘程強い、即ち現

在の外部刺激に對して強く反應する人である。

三、神經質の人は意志的反應としては強いけれども行動に出でないのが特色である。即ち自己本位で未來的であるからである。

四、粘液質の人は意志的反應としては弱い、即ち行動は敏活ではない、そして此の性格の人も自己本位で未來的である。

精神的疾患

1. 癲 痺 症

腦梅毒のある形式と關聯した精神的疾患である身體に於ては一般に虚弱となる程の癲痺は少ない。然し精神的方面に於ては、それが進行すると遂には痴呆となる。外見上の回復又は減退が通常起るが、然し直ちに再發し遂には致命的となる。

2. 偏 執 狂

之れは前述の癲痺症と異なり神経系統の上に何等の變化を發見す

る事が出来ない。此の疾患の特質は慢性の系統的妄想で、それが烈しくなつても、痴呆状態を呈する事は殆んどない、例へば變り者か奇人とか云はれる者は、偏執狂に罹つてゐるか或は少なくとも偏執狂的性格を有するものである。偏執狂の代表的なものを挙げれば下の如し。

- (1) 愛情に關する妄想(幼兒愛妻をなくした時)
- (2) 訴訟や論争を常に事とする者
- (3) 發 明 狂
- (4) 宗教的妄想
- (5) 政 治 狂

3. 二重人格(夢遊を含む)

4. ヒステリー

ヒステリーも又機能的精神病に屬するもので、別に神經に何等故

第三編 情意活動

障を持たぬものである。

5. 精神分析學

—〔要説心理學終〕—

要説心理學

定價 八拾錢

不許複製



著者	見 尾 勝 馬
發行者	東京市日本橋區 通三丁目一番地 原 瀧 三 郎
印刷者	東京市神田區 表紙樂町二番地 尾 藤 光 之 介

發行所	東京市日本橋區 通三丁目一番地	文 原 堂
		振替東京 7171 番 電話 日本橋 4519 番

昭和7年6月5日印刷 昭和7年6月10日發行

法政大學 講師 見尾勝馬著

東洋哲學史概説

四六判上布裝
定價一圓八十錢
送料十二錢

本書は東洋哲學思想の起源發達の史的考察を系統的に起述されたもの
支那哲學及び印度哲學を極めて容易に識しめ且つ纏て吾が日本哲學、即
ち我が精神文化の眞隨を穿つ道程たらんとするものである。専門學校、
高等學校の教科書及び参考書並に一般哲學研究學徒の爲に廣く各位の机
前に捧ぐ。

文學士見尾勝馬著

和歌論語

四六判定價六十錢
洋裝送料四錢

本書は東洋哲學の一異彩であり、支那哲學の本源であり、日本道德の
眞隨骨子となつた論語を和歌になしたものである。日本人にとつて最も
重大にして且つ最も難解とされた論語がこれ程最も簡單に最も明瞭に最
も美しく表現されたものは未だ嘗てない。乞一讀。

小林榮子編
鈴木朱雀畫

俳句いろはかるた

定價三圓
送料十八錢

幼少年から老年に至る迄のかるた。一家中揃ふて皆が皆面白くとれ
るかるた。幼少年には高雅なる趣味を養成し、青壯年の士には知らず
くのうちには俳句の深奥を知らしめ且つ俳畫の家庭教師ともなるであら
ふ。全部木版手摺り高尚優美かるた中の王座である。美麗なる解説小冊
子附。

京仕立桐箱入

特220

727

終

¥.80